こちらとあちらとそれに関する諸々の話

白藍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
こちらとあちらとそれに関する諸々の話

【Ｎコード】
Ｎ３０７９Ｙ

【作者名】
白藍

【あらすじ】
部屋の鏡に知らない人が映っているのだが。誰なんだ、一体。幽霊だという解答は、恐すぎるので、全力で却下させていただく。ホラーが苦手な私が出会った恐怖体験アンビリーバボーの世界へようこそ。
嘘です。異世界とつながっちゃったけど、どうする？どうしようか？みたいな話です。多分。
連載小説初投稿かつ見切り発車もいいとこなので、まったりゆったり、お付き合いください。

繋がりました（前書き）

この度は、拙作に足をお運び頂き、ありがとうございます^^警告タグは保険として、つけてます。

繋がりました

ある夜、ふと自分の部屋の鏡を覗くと、何かがおかしかった。というか、全てがおかしかった。前に立っている自分を映すはずの鏡に、見知らぬ男が映っていたのだ。

「……っ」

びっくりしすぎて声が出なかった。思わず、後ろを振り向いたが、見慣れたベッドがあるだけで、誰もいない。当たり前だ。ここは、私の部屋で、誰かが入ってきた気配もなかった。やめてほしい。私はホラーが大の苦手だ。二十歳も過ぎてから、霊感が目覚めることがあるのだろうか。今まで、幽霊を見たことも、感じたこともなかったし、これからもないだろうと油断していた。いやだ、こわい。見間違いであることを祈りながら、おそるおそる首を回し、視線を鏡の上に戻す。

果たして見知らぬ男は、まだそこにいた。ぎょっとして身を引き、鏡から距離をとる。目を見張り、こちらを凝視してくる男としばしの間、見つめあった。混乱のあまり、硬直していたとも言う。

何か音が聞こえ、固まっていた自分に気づき、はっとする。音の出所は、目の前の男のようだ。なにか、強い口調で、話しかけられている気がするのだが、全く意味がわからない。恐怖のあまり、幻聴かとも思ったが、もう一度、男が語りかけてきたので、その可能性を却下し、不思議な聞いたこともない音に耳を傾ける。やっぱり、何を言っているのかは、わからない。眉を寄せ、首をかしげながら、鏡を眺めていると、男は少しいらついた様子で、こちらから顔を背けて、舌打ちをした。

「感じの悪い男ね」

思わずぼそりと、つぶやいてしまう。幽霊にしては存在感のありすぎる鏡の中の男に少しだけ恐怖が麻痺したようだ。我ながら、恐がりなのか、図太いのか謎だ。男は、再度、目線を合わせてきて、顔をしかめたまま、口を開いた。何度、話しかけられても、わからないものはわからないので、弱りきった体(てい)で首を振ると、男もあきらめたように、大きく息を吐いた。

少し落ち着いてくると、この奇妙な邂逅に対するさまざまな疑問は、横に置いておいて、目の前に居座る男を観察する余裕が出てきた。

一言で言うと、黒い。艶やかな黒髪は、後ろでまとめられており、背中の中ごろまで流れている。切れ長な目も漆黒で、奥に闇を飼っているようだ。すっと通った鼻梁に薄い唇。今まで見たこともないような美形だ。質の良さそうな、黒いガウンを羽織っており、高貴な雰囲気を醸し出している。これで金髪碧眼なら、きらびやかこの上なし、というところだが、色彩の明度が低いのが、せめてもの救いだ。それでもあまり直視できない美貌と身のこなしである。

私が男を観察している間、向こうも鋭い眼光でもって、こちらの様子をうかがっていたのだが、ほどなくして、男が鏡面を軽く叩き始めた。コツコツと振動がこちらにも伝わってくる。

それにしても、この鏡はどういう構造になっているのだろうか。叩けるということは、空間的にはつながっていないはずなのだが、音は響くのだ。音だけを通す不思議物質で出来ているのか。今のままで何の変哲もない普通の鏡だったはずだ。そっと鏡に手を置い

て、こちら側からも試しに叩いてみる。確かに手は通り抜けない。静かな空間に、私と男が鏡を叩く硬質な音だけが響く。

「なんか、おかしい。自分の部屋で知らない男と向かい合って鏡を叩いてるなんて」

苦笑がもれる。コツ、と鏡を断続的に叩いていた男の手が止まった。不思議に思って目線を上げると、眉間にしわを寄せた男の黒々とした瞳が、高い位置から、こちらを見下ろしていた。鏡を隔ててはいるが、至近距離で、男の威圧的な視線を受けると、身がすくむ。何かまずいことでもしてしまったのだろうか。

「お前、一体何をしたんだ。急にこちらの言葉を話し出すから驚いたぞ。魔術師か何かか」

「えっ、そっちこそ、なんで日本語」

目を見開いて、すかさず後ずさり、男を見つめる。わけがわからない。どうして突然、言葉が通じるようになったのか。男もあごに右手を添え、眉をひそめて、考え込むように、こちらを凝視している。とりあえず、落ち着かなければ。うん、そうだ、理由はなんであれ、言葉が通じるようになったということは、この鏡の中の住人とコミュニケーションがとれるということだ。

「あんた、誰なの。人の鏡に、突然現れるなんて、人間じゃないとか言わないでよ」

もう寝てもいいですか

ともかく、やっと目の前の怪しい超絶美形男と意思疎通ができると思い、発した言葉に、返事は返ってこなかった。いや、正確には、返ってきたのだが、またあの聞いたことのない音になっていたのだ。

「ちょっと、どういうことなのよ。通じたり、通じなかったり、わけがわからないわ」

鏡の中の男も、腕を組み、難しい顔でこちらを見ている。唐突に、毛足の長い柔らかそうな絨毯にどっかり胡坐をかいた男は、長考姿勢に入ったようだ。いいかげん立ちっぱなしも疲れてきたので、私も鏡の前に膝を抱えて座った。膝の上にあごを乗せて、ぼんやりと鏡を眺める。

顔を若干、うつぶせて考えに耽っている男のまつ毛が目に入った。女なら誰でもうらやむような長さだ。鼻も高く、典型的日本人顔の私から言わせれば、その半分の高さでいいから分けてほしい、といったところだ。黒髪黒眼と、色彩は似ているが、形状は似ても似つかない。ともかく、日常で、ここまで整った容姿の人にお目にかかる機会などないに等しいので、目の保養をさせてもらおう。

体つきは一見、すらっとした長身だが、ガウンから覗く胸筋を見る限り、きちんと綺麗な筋肉がついているのだろう。あらゆる意味で実用的な身体をしている。眼光が鋭く、険しい表情ばかりなので、威圧感ばかりが強い印象を受けるが、目を合わせていない今は、あふれ出る色気にあてられそうだ。このようなことをつらつらと考えている時点で既にアウトのような気がする。

あやしくなり始めた思考にストップをかけて、視線を移し、時計を見ると、日付が変わり、一時を過ぎていた。人間とは不思議なもので、もう夜中だと認識すると、途端に眠くなってくる。緊張と混乱状態が、緩んできたのも原因だ。

とりあえず、この不可解な現象については、明日に持ち越そうと決めた。眠くては、考えられることも考えられない。よし、今日はもう寝ようと、鏡をノックの要領で軽く叩く。

音が響いたのだろう。男は、思考の海から抜け出し、こちらに顔を向けた。目で先を促してくる。言葉が通じないので、後ろにあるベッドを指差し、寝たい旨を訴えてみる。男が怪訝な表情を浮かべたので、伝わらなかったのかと思い、ベッドの布団をまくって寝転がり、眠るふりをした。だめだ、このまま眠りの世界へ沈み込んでいきそう。

意識が、現実世界と別れを告げそうになった瞬間、がつっと大きな音がした。びくりと身体が跳ねる。重たい瞼をこじ開けて、音の発生源を探すと、男が右の拳を鏡面に叩きつけていた。

何やら怒っているようだ。黒い瞳は、鋭いを通り越して、人を射殺せそうな眼光を発している。眠気も吹っ飛びそうなくらいだが、それでも強烈な眠気にあらがえない私は、激しい反発を覚えた。

人の鏡に勝手に現れておいて、貴重な睡眠も妨げるつもりなのか、この男は。いつもなら確実に即、平謝り決定の視線に違いない。だが、眠い私には関係ない。わき上がる怒りのままに、ベッドから飛び降り、猛然と鏡に向かって突進した。両手を鏡面に叩きつけるように置く。半眼で男を見据えた。極度な眠気は人格を変えるらしい。

「あんた、何様よ。人の睡眠の邪魔するんじゃないわよ。また、明日、相手してあげるから、今日はもう、おとなしく寝なさいよっ」

機嫌の悪さが、ふんだんに、こめられた罵声が部屋中に響いた。自分の声で少し我に返る。鏡に拳を当てたままこちらを威嚇してくる男と対する。眉間にしわを刻んだ凶悪な顔面に心臓が縮こまった。美麗な顔が、凶器のようだ。

ごめんなさい。どうせ理解できないからと、暴言を吐いた私が悪かったです。悪かったから、もう寝かせてください。もういろいろと限界です。

「お前こそ何様だ。この私にそんな暴言を吐いたのは、お前が初めてだ」

もう寝てもいいですか（後書き）

読んで頂き、ありがとうございます^^書いてる間、ずっと眠かったのは、実は作者だったりします。

言葉通じました

険悪な雰囲気の中、鼻先をかすめそうな距離で、男とにらみ合う。嫌味なほど長いまつ毛も今なら数えられそうだ。疲れと眠さで、にらみ合うのも面倒になって、もう勝手にベッドに入ろうと、男から視線を外し、踵を返す。

「ちょっと待て」

命令口調に腹立ちの火種が疼いたが、あえて無視をする。待たない。今は、この男より睡眠あるのみだ。寝て起きたら、明日には、もとの普通の鏡に戻っていることを激しく希望する。

「手を――――――――」

手を、何だと言うのだ。声が途中から不思議な旋律に変わる。鏡から数歩のところで、男の方に振り返った。ぼんやりと両方の手のひらを眺める。視線が鏡と手のひらを往復する。待てよ。

「もしかしなくても、今、言葉通じてたんじゃ……」

つぶやいた途端、意識が覚醒へと向かう。眠たいときの反応の鈍さには、我ながら呆れる。今、確実に鏡の中の男と会話が成立していた。今度はしっかりと鏡を見つめる。

男は、頬杖をつき、冷たい視線をよこした。全身で呆れを表現しながら、手のひらをこちらに向けて伸ばし、鏡面に、ひた、と触れ、私に深くうなづきかける。

私も鏡に触れろ、ということか。両者が、鏡面に触れていなければ、言葉は通じないのだろう。先ほど、男の言葉が、途中からわからなくなったのは、私が鏡についていた手を離したからか。

ゆっくりと、少しの緊張をはらみながら、鏡に手を伸ばす。指の先が面に触れ、冷たい硬質さを感じる。

「お前、脳みそ生きてるか？　いくらなんでも鈍過ぎるだろ」

私が鏡に触れた途端に、男の痛烈な皮肉が飛んできた。よほどいらいらしていたのだろう。

「言いたいことは、それだけ？もういいかげん寝たいのよ、こっちは」

こんなまっくろくろすけに負けてられるか、と不機嫌さのあふれる口調で切り返す。

「お前は、口を開けば、眠いだの、寝かせろだのと、この異常な状態で寝られる神経がわからん」

低く響く声音で、嫌味を言う。いい声なのだから、もっと違う用途で使うことを奨めたい。さらに言うなら、眉間にしわを寄せた険しい表情のせいで、人付き合いにおける美形という人種が受ける恩恵をどぶに捨てているということも忠告したい。

「……お前、そんなに私を怒らせたいのか。鏡があって命拾いしたな。なければ首が飛んでいたところだ」

地を這うような声が伝わってきた。どんどん空気が重くなってい

る気がする。何故だ。私は、眠りたいだけなのに。

怪訝な顔をして男を見た。鏡の中の住人は、はあ、と大袈裟に息をついて、目をすがめ、幾分か表情を緩めた。

「思ったことが、口から全部出ているぞ。まあ、そんなことは、どうでもいい。とりあえず、お前は誰だ」

なんと、私の口め。険悪な雰囲気に油を注いでいたのは自分だったのか。

「誰と聞かれても、しがない一般庶民ですけど。あんたこそ、お金持ちの坊ちゃんみたいな生活してそうだけど、何様よ」

男は、片眉を上げ、腹立たしげにこちらを見る。

「先程から、おかしいとは思っていたが、私の顔を知らない時点で、ディアスの民ではないようだな」

ディアスとは何だ。聞いたこともないが、マイナーな外国名なのかもしれない。それにしても、この男、自国では顔パスのようだ。施政者のたぐいか。

「れっきとした日本人よ。ディアスってどこの国なの。アジア？ヨーロッパ？」

鏡をはさんで、お互い、いらだちを含んだ困惑した表情を曝している。

「日本もアジアもヨーロッパも聞いたことがない。私の世界は、デ

ィアスだと言っている。その他の名称で呼ばれることなどない」

意味がわからない。日本は、ともかく、アジア、ヨーロッパを知らないのは、おかしい。それに、この男、今、世界と言ったか。統一された単一の国家なのだろうか。ますます現実味のない話だ。意志疎通できるようになったのはいいのだが、謎は深まるばかりである。

とりあえず、私にとっては、男が幽霊だという選択肢は却下できそうなので、それだけが救いだ。こんなにはっきりと対話できる奴が幽霊であってたまるか。鏡越しの確認だが、足もあるようだし、男がどこの世界、そう言っていたから世界と言っておく、出身であろうが、人間であれば良しとしておこう。

「あー、ほんと、頭が混乱して来た。ここらへんで、今日はもうお開きにしない？明日、学校も行かなきゃだし、切実に眠りたい。あんたも、明日、仕事とかあるでしょ。帰ってきてから、また話し合おうよ。どっちかが、鏡叩けば、それに応じるってことで」

鏡に手をついたまま、首をめぐらし、大きな布がないか探す。流石に、音は防げないが、視界は塞ぎたい。これでも一応、二十一歳の女なのだ。私の寝姿や着替えなど、見ても何の得にもならないが、こちらの精神衛生上、非常によろしくない。

「結局、寝るという結論か。まあ、そうだな、明日も早い。たいした時差もなさそうだし、お前の提案に従おう。私も、もう寝よう。ではな」

さっと、手を離し、堂々とした歩みで去っていく男が鏡に映る。目の前から男の姿が完全に消えると、私もそっと手を離した。部屋

の棚に置いてある籠から、大きめのバスタオルを引っ張ってきて、鏡面を隠すように掛ける。

「……とりあえず、寝よう」

言葉通じました（後書き）

読んで頂き、ありがとうございます^^　二人の自己紹介までなかなか辿り着かないです。なんでだ。

現実逃避は好きですか

起きたら、全部、夢でした。

なんてことにはならず、そろっと、可愛いのか可愛くないのか微妙なキャラクターの描かれたバスタオルをめくってみたら、豪奢な飾り棚のようなものが映っていた。他にも、毛足の長い、ブラウンの絨毯に、丸くて光沢のある小さなテーブルなど、私の部屋には到底あるはずもない家具たちが、鏡の中に鎮座していた。バスタオルを元に戻す。

「ああー、夢じゃなかった。夢じゃ……なかった」

額を右手で押さえる。朝から、頭が痛い。いや、いったん忘れよう。帰ってきてから考えよう。頭の片隅では、完璧なる現実逃避だとはわかっていたのだが、心の平安のため、鏡と男のことは、記憶から抹消した。

コツコツ。

夜、十一時過ぎくらいに、バスタオルの向こう側から、硬質な音が響いた。私は、もっと早くに帰ってきていたし、向こう側の住人が帰ってきたのもわかっていたのだが、こちらから、鏡を叩く気になれずにいたのだ。今も、無視したい気分でいっぱいだ。バスタオルのキャラクターと視線を合わせながらしばらく様子を見る。

コツコツ。

聞き間違いではなかったようだ。往生際が悪いことは、わかっている。実は、男がいない間に、バスタオルをめくって、ちらちらとあちら側を確認していたことも認めよう。だが、音が鏡の向こうから響いてくるという非現実な現実を受け止めたくない自分もいるのだ。

私が、現実逃避という名の無視を決め込んでいると、呪いでもかけられているのではないかと疑うくらいのおどろおどろしい低音が、響いてきた。それが、バスタオルのキャラクターとミスマッチ過ぎて、恐いやら、笑えるやらで、反応に困る。

鏡の向こうで男が脅しをかけてきたことは、十分にわかったので、仕方なくバスタオルをめくり、鏡と向き合った。眉間にしわを寄せた鋭い眼光の男が、昨日同様、目の前に映っている。黒いガウンを纏った男は、今日も黒い。ちなみに私は上下スウェットで、寝る準備は万端だ。

男はもう手のひらを、鏡に置いていて、見下ろす視線で催促されたので、私も仕方なく、鏡に触れる。

「ご、ご機嫌麗しゅう……？」

無視した後ろめたさも相まって、苦々しい笑みを作って男を見上げ、視線を合わす。

「これが麗しく見えるのか。お前が、なかなか鏡を叩かないから、こちらから叩いてやったというのに。昨日は、お互い混乱していて、自己紹介もままならなかったから、今日はそこからだな。私は、ラインヴァルト・カイザー・フォン・ディアスという。お前の名はなんだ」

なんというか、私は貴族です、と言わんばかりの長々しい名前だ。ライ、ライン……なんとかかんとか、ディアスと言っていた。昨日聞いたディアスは、確か男の世界の名ではなかったか。ありふれた姓としてディアスが使われているのかもしれない。男の風貌や、立ち居振る舞いからも、その線は限りなく低いことがわかるが、あまりつっこんで考えたくはない。

「私は、友希。水無瀬友希（みなせゆうき）。あ、名前が友希で、名字が水無瀬ね。で、ディアス在住のディアスさん、あんたはなんで私の鏡の中の住人なの？」

ほんと、最初見た時は、とうとう幽霊なる者に遭遇してしまった、と恐怖の極致だった。これがおじいちゃん、おばあちゃんだったら、ショックで心臓が止まってると思う。

「それは、こちらのセリフだ。執務から帰ってきたら寝室の鏡に見知らぬ部屋が映っていたのだからな。それにお前が急に現れたから、更に驚いたぞ。魔術師が賊に入ったのかと思った」

魔術師とは、またファンタジーな単語が飛び出してきたものだ。そんな怪しげなものになったことは、生まれてこのかた一度もない。賊もしかり、だ。だが、それよりも。

「ディアスさん？自己紹介したんだから、いいかげん、お前って言うのやめてくれない？」

眉をひそめながら、少し挑発の雰囲気を籠める。男は、正面から身体をずらし、右手を支柱にこちらに向かって体重を傾けていた。左手で額にかかる前髪をかきあげ、その間から、黒曜石のような瞳

を細めて見下ろしてくる。

上からの流し目に、心臓が大きな一拍を打った。そうだ、この男、人とは思えない程の整った容姿をしていたのだった。威圧感に慣れてくると、ますます美貌が際立つ、ということに今、気づかされた。できるだけ、さりげなく、視線をそらす。

整いすぎた美貌というのも考えものである。確実に、心臓細胞のいくつかが、破壊された気がする。鏡越しの距離も、実際に触れることはできないのだが、近すぎるのがいけない。殺気まがいの威圧感や、色気垂れ流しのフェロモンに、凡人の心臓はどこまで持つのだろうか。がんばれ、私の心臓。

「真っ先に言うことはそれなのか。もっと他にあるだろう、まったく。それで、お前はなんと呼んでほしいのだ？私に数々の暴言を吐いてくれた勇気に免じて、特別に希望を聞いてやろう」

声に反応し、視線を戻してしまった。右ひじを折り、腰をかがめた男の顔が目の前にせまる。黒い瞳の奥にある闇色に囚われそうだ。鏡越しだが、壁際に追いつめられた錯覚をおこす。傍からみれば、良からぬ輩に絡まれているように見えるだろう。ただ、ものすごく妖しい雰囲気を纏った輩ではあるが。

自らを知り、人を圧倒し、支配し慣れた者が持つ濃厚な気配に身の毛がよだった。目をそらすこともできないままに、知らず、左足が一歩、後ろに動く。男はそれを認めると、薄い唇の端をゆっくりと見せつけるようにひき上げた。

「ん？さっきまでの威勢はどうした。ユウキ？」

さらにグッと顔を寄せて囁いてくる。低い心地の良い声が鼓膜を響かせた。男の黒い目がきらめいて、おもしろがっている。悔しい、悔しいが、今まで経験したことのないような高圧的で妖艶な空気に当てられて、顔から血の気が引いているのが、自分でもわかる。早く復活しろ。気合いをいれて、バッと、視線を無理やり引き剥がし、向こう側の絨毯を斜めに見やる。非常に不本意だが、自分の身は大事にしなければならない。

「……やっぱり、お前、でいいです。名前呼ばれる度に寿命が縮むわ」

現実逃避は好きですか（後書き）

読んで頂いてありがとうございます^^やっと名前が出てきました。
ふいー。

ほのぼの日常してます

結局、あの後、男は散々面白がった上に、私の希望は聞き入れず、ユウキ、と呼ぶことに決めたようだ。ちなみに、男のことは、ライ、と呼ばされることになった。ラインヴァルトの愛称としてライと呼べ、ということらしい。そうなるまでの経緯は推して知るべし、だ。思い出したくもない。

当初は、自分と他人のプライベート空間が繋がって、ストレスを感じるかと思ったのだが、案外大丈夫だった。ライは、いつも執務が忙しいらしく、夜中、早くても日付が変わる前くらいにしか寝室には帰って来ないからだ。最近では、寝る前のちょっとした話相手と化している。バスタオルで目隠ししているので、大きな音を立てなければ、比較的自由にしていられるし、図太く産んでくれた親に感謝である。

「あー、今日は何しようかなぁ」

一人暮らしは独り言が増える。今日は休みなので、お昼前まで爆睡していた。お腹がすいたので、簡易キッチンの横に設置された冷蔵庫を開ける。確か、冷やご飯があったはずだ。半分残った玉ねぎとパックのしめじも一緒にとり出す。玉ねぎをみじん切りにして、軽くオリーブオイルをひいたフライパンで炒め、しめじを投入する。適当なところで、牛乳とコンソメ、冷やご飯も加える。水分がなくなってきたら、仕上げに、バターとチーズをからめて、簡単適当リゾットもどきの完成だ。

チーズのいい香りが漂う中、テレビの前に置かれた小さなテーブ

ルの上に、食事の準備をしていく。愛用の白いカップにお茶を注ぎ、スプーンを持って、いそいそとクッションに腰を下ろす。よし。

「ユウキ」

さあ、食べようとスプーンでリゾットもどきをすくった瞬間に、ここ何日かで、だいぶ聞き慣れた低音が部屋に響く。なぜか、名前だけは離れていても伝わることがわかってから、だいたい用があるときは、どちらからともなく、名前を呼びかけるようになっていた。それにしても、私が食事をするタイミングを見計らっていたのではなかろうか。待たせると機嫌が悪くなるのは、目に見えているので、お盆にリゾットとお茶を乗せ、鏡に向かう。

バスタオルを外すと、もう鏡に手を触れたライが、目の前に立っていた。今日も相変わらず見目麗しい。ガウン同様、普段着の彩度も低いが、それがまたよく似合うから腹立たしい。それはともかく、こんな昼間から、声をかけてくるとはめずらしい。何かあったのだろうか、と首をかしげながら、鏡に触れる。

「どうしたの？」

「いや、何、ということもないのだが、少し時間がとれたので帰ってきたのだ。今日はユウキが休みだと言っていたのでな。暇をしているのではないかと思って、気を遣ってやったのだ。いつも夜ばかりだし、昼間に会うのも新鮮でいいだろう？」

なかなか、かちん、とくることを言ってくれるのだが、これに乗ってしまうと、話がいつも逸れる上に進まないので、ここは私が大人になろうとがんばってみる。しかし、この男、私が一々咬みつくのがおもしろくて、わざと煽ってくるふしがあるので、手に負えな

い。

「新鮮って、ほとんど毎日顔あわせてる相手に使わないわよ。夜に会っても、昼に会っても、あんたの印象まっくろくろすけだしね」

前にまっくろくろすけとはなんだ、と聞かれたので、絵に描いて見せると、その可愛らしさに複雑な顔をしていたのを思い出す。頬を緩めて、にやつきそうになっていると、目の前の雰囲気が変わった。

「ユウキ」

低くて心地の良い声が耳をくすぐる。闇色の目を細めながら、形の良い唇の端を上げたライが、目に入った。途端、背筋に悪寒が走る。目が笑っていない。恐いからやめてほしい。この顔かたちの整った男が、これをやると、冗談にならないくらいの威力を発揮するのだ。凡人はおとなしく屈するに限る。

「ごめんなさい！はい、謝ったから、その物騒な雰囲気早くしまって、ライ！」

ライには、まずいと思ったら素早く謝る、というのが鉄則だ。私の寿命を守るためには絶対厳守だ。動物が一生涯で打つ心拍数は、だいたい決まっていて、ゾウもネズミも同じくらいだと聞いたことがある。ネズミの方がだいぶ脈拍が早いらしい。その理論でいくと、私も、心拍数が上がると寿命が縮まるということになる。危ない、危ない。

「お前は、本当に謝る気がないのが、まるわかりだな、まったく」

当たり前だ。自分は平気で、お前、お前、と連呼するのに、私が、あんた、と言うと、必ず名前で呼ぶように強要する男に、謝る気持ちなんてこれっぽちもわかない。いや、少しはわくが、反抗心の方が強くでてしまうのだ。我ながらかわいくない。

「だって、お昼ごはん冷めるし。お腹すいてるし」

お盆を床に置いて座り、足の先を鏡につける。行儀の悪いことは承知の上だが、身体の一部分が触れていれば、言葉が通じるので体勢としては楽だ。ライは若干呆れたような目で見下ろしてから、自分も片膝を立てて座った。

「昼食の途中だったのか。何やら持っているな、とは思っていたが。自分でつくったのか？」

リゾットを食べながら、ライの鏡面についた右手をぼんやりと見やる。料理は好きなので、少しなら自信がある。実家で暮らしていた時も、概ね好評だった。

「そうよ。これでも結構料理うまいんだから」

得意げに返すと、眉を上げて、驚いた風な顔をする。いつも上下スウェットの女が料理をするのがそんなに意外か。

「それは見かけによらず。誰にでも一つくらい、長所があるんだな」

大いにからかいを含んだ声だ。おもしろがっているのがわかる。というか、いつも夜中に会うからスウェットなだけで、外に出るときは、きちんと化粧もしているし、それなりに身だしなみには、気を遣っている。

「うわっ！ひどい言い草っ！もしも、そっちに行くことがあったら、手料理食べさせてやるのに。絶対おいしいって言わせてみせるから！」

瞬間、ライの雰囲気がなぜか、急に和らいだ気がした。彼の唇が薄く笑みを佩く。

「そうだな、楽しみにしている」

ほのぼの日常してます（後書き）

ここまで読んで頂いてありがとうございます^^リゾットが食べたいよー。

癒しグッズは大切にしましょう

正直、目が釘付けになったまま、呆けてしまった。ライの皮肉を含まない笑みなんて初めて見たからだ。威圧感が緩んだ純粋な笑みは、綺麗過ぎて言葉が出なかった。ああ、心臓に悪い。そんな人並み外れた美貌の持ち主は、今日も執務から帰ってきて、グラスを片手に目の前に座っている。多分中身はブランデーだ。

「ねえ、ちょっと気になってたんだけど、そっちって土足よね。いつも、じかに座ってるけど、汚れないの？」

ブラウンの柔らかそうな毛の絨毯が、とても気持ち良さそうで、いつも触れてみたくなる。できないのはわかっているので、自分の部屋のラグの毛をさわさわと撫でる。このやわい感触に癒される。

「ああ、毎日、侍女らが掃除してくれているから大丈夫だ。履物も部屋に入る時に、除去マットで綺麗にするしな」

足元の毛足の長い絨毯を左手で撫でながら、鏡に肘をつき、興味なさそうにグラスを傾けている。あの、ふかふかの毛並みの中に座ってみたい。きっとすごく気持ちがいいはずだ。それにしても、料理は得意だが、掃除は苦手なので、うらやましい限りだ。適当に掃除機をかけるだけで終わる私の部屋とは違って、毎日隅々まで綺麗にされているのだろう。

「毎日掃除してくれる人がいるなんて、いいご身分ね、ほんと」

右手から伝わる鏡面の冷たさと、左手で触れている毛の優しい柔

らかさを感じながら、ライの黒曜石のような瞳を見上げる。こちらを馬鹿にするような、少し呆れたような表情の後、すっと視線を遠くに移し、薄い唇を苦笑の形にゆがめた。

「うらやましいなら、いつでもかわってやるぞ。ただし、執務に忙殺される覚悟があるのなら、だが」

いわゆるノブレス・オブリージュというやつか。そうされるだけの身分には、それだけの覚悟と義務が付随してくるというわけだ。そういえば、ライは、貴族だと思うのだが、どのあたりに位置しているのだろうか。政務や執務という単語が出てくるから、宰相職かなにかだろうか。

「謹んで遠慮させていただきます」

面倒なことが嫌いな私は、すぐさま満面の笑みで辞退した。ちら、と目線をこちらによこしたライは、片頬をあげている。黒々とした瞳には、おもしろがる光が浮かんでいて、先ほどよりも柔らかい表情だ。容貌が整っているだけに、笑みに無邪気さが混ざると、可愛く見えてしまって困る。

高圧的なからかいを含んだ笑みに慣らされている私には、時々不意に見せるライの純粋な笑みに対処する術がない。違う意味で圧倒されるのだ。ああ、どんどん寿命が縮んでいっている気がする。どちらにしても、激しく心臓に負担をかけてくる男である。視線を外し、床のラグを見つめ、指先で毛をつまんでみる。くすぐったい。

「なんだ、残念だな。お前に押しつけたら、この忙しさから逃れて、自由に過ごせると思ったんだが」

くつくつと、のどの奥を震わせながら、両目を細めている。私の心中など、我知らず、楽しそうでなによりだ。美麗な男を眺めて、目の保養などと言ったが、あれはたまに鑑賞するからよいのであって、毎日だと刺激的過ぎることに気がついた。今更ながら、穏やかに過ごすためには、関わることなかれ、ということだったのだ。本当に私にとっては、時すでに遅し、なのだが。

そうは言っても、時折訪れる不整脈にさえ堪えれば、実は、ライと話しているのは思いの外楽しい。こちらとは違う生活様式や、自然体系など、異世界間交流とでも言うのだろうか。単一国家などこちらの世界にはないから、きっと異世界同士なのだろうという仮定に落ち着いたのだが、同じようなところも多々あるからこそ、それ以上にある様々な違いに触れたときが、おもしろいのだ。単純に興味深い。

「……さっきから、ひたすら絨毯の毛をむしっているようだが、その絨毯、大丈夫か？」

いぶかしげな声が聞こえて、はっ、と流れに流されていた思考が現実に戻る。曲げた両膝の上にあごを置いて、一心にラグの毛を引っ張っていたようだ。私の大切な癒しグッズが無残な姿になっている。労わりの気持ちを込めてラグを撫で、毛並みをなおす。その行動を珍妙な動物を観察する目で静かに見届けたライは、すっ、と立ち上がった。

「どうせ、もう眠いのだろう？お前がおかしなことをし始めたら、大概そうだしな。今日はもう寝るか。では、またな。おやすみ、ユウキ」

会話を切り上げて、寝台に向かうライの後ろ姿を見送る。角度を

変えると結構広い範囲で向こう側を見ることができる。電車の扉の窓から見る外の景色のようだ。なんとなく、姿の見えるぎりぎりまで見届け、バスタオルをそっと掛ける。踵を返して、部屋の明かりを暗くし、ベッドに潜りこんだ。横になってまるまり、目を閉じる。

彼は、いつも私のことを、お前と言うくせに、最後には必ず、名前を呼ぶのだ。

「おやすみ、ライ」

癒しグッズは大切にしましょう（後書き）

読んで頂いて、ありがとうございます＾＾ふわふわいいですよねー、ふわふわ。

全ての元凶はホラー映画です

今日は精神的に疲れた。大学の友達が、映画に行くというので、ひさびさに映画もいいか、とついて行ったのが、大きな間違いだった。洋画のアクションものが観たかった私に対して、友達らは、邦画のホラーが観たかったようで多数決で負けたのだ。ここまで来たのだから、と半ば無理矢理引きずられ、一緒に鑑賞してしまった。怖いもの見たさの精神で、結局最後まで観てしまい、今現在、後悔に打ちひしがれている。

「……ライ、早く帰って来ないかな」

部屋に帰ってきた時は、大丈夫だったのだが、夜になるにつれて心細くなってきた。邦画のホラーは特に観てはいけない。あの、端の方に映っている恐怖に、じわじわと浸食されていく感じがもう、恐すぎる。そんな焦らしはいらないから、ひと思いにやってくれ、と何度も思った。

外が暗くなって、いったん、恐怖に絡めとられると、そこから抜け出せなくなった。影になるところになにか潜んでいる気がして、明かりを全てつける。意味もなく、テレビもつけて、音量を心持ち大きめに設定する。

鏡のバスタオルを外し、ベッドから掛け布団を引っぱってきて、くるまり、その前に陣取った。膝をかかえて、布団から出ている足先で鏡面に触れる。ひんやりとした冷たさが伝わってくた。ぎゅっと目をつぶって、もう絶対、誰がなんと言おうとホラーは観ない、だから、早く帰ってきてください、と鏡の向こうにわけのわからな

い祈りを捧げる。

どれほど時間が経ったのか、向こう側で、扉が開く気配がした。はっと、顔をあげると、大股でこちらに向かってくるライが目に入る。

「何をしているんだ、お前は」

鏡に片手をつき、眉をよせて、上から覗き込んでくる。現金なもので、ライの顔を見たら、急に恐怖がしぼんだ。一人でいるのと、誰かがいるのとでは、精神的にだいぶ違う。

「な、なんでもないわよ。それより、今日もお疲れ様。いつもより、ちょっと遅かったんじゃないの？」

ばつの悪さを隠すように、胸のあたりで布団をかきいだき、立ったままのライを見上げる。

「いや、むしろ早かったくらいだが。どうした、なんか変だぞ、お前」

恐さのあまり、時間感覚が狂っていたのだろう。それに待っている間は、長く感じるものだ。ライはいぶかしげな表情でこちらを覗きこむように、その場に座った。いつものごとく黒いガウンがよく似合っている。そう、ガウンが……。

「うあー！今、重大なことに気がついた！最大の難関、お風呂が、まだだった！」

布団を離し、頭をかかえる。ホラーの後の、お風呂はだめだ。頭

を洗って、目を開ける時の恐怖と言ったら、想像だけで身がすくむ。

「風呂がどうしたというのだ。本当に、今日はどうした。いつもおかしいが、今日はそれに輪をかけておかしいぞ。きちんと、私にもわかるように説明しろ」

急に叫び出した私に、少し目を見開いて眉をあげている。怪訝を通り越して、完璧に不審者を見る目をしていた。実際、不審者そのものだから仕方がない。いや、仕方なくない。この男、結構ひどいことを言っている。

「いつもおかしいってどういうことよ！っじゃなかった。あの、私、いまからお風呂入ってくるから、ライ、ここに居てくれる？」

「はっ！？お前、自分が何を言ってるのか、わかっているのか？」

黒々とした瞳をめいっぱいに開き、眉間にしわをよせて、鏡についた手にも力が入っている。

「とりあえず、お風呂入ってくるから。私が出てくるまで絶対ここにいてよ？わかった？」

私の、尋常ではない剣幕に押されたのか、ライは、怪訝な表情のまま、承諾してくれた。ライの中での私の位置づけが、確実におかしな方向へ傾いていくのはわかったが、背に腹はかえられない。

鏡からの視線を一切無視して、着替え一式を持ってお風呂場へ直行する。昼間の映画を思い出さないようにしながら、シャワーを浴びる。あまり待たせるのは悪いというのと、恐いから早く出たいという気持ちが相まって、カラスの行水だ。上下スウェット着用で、

鏡の前に戻る。

「で、どういうことなんだ、一体」

いつの間にか、グラスを手にしたライが、半眼で視線を合わせてくる。お風呂に入る、というミッションを終え、落ち着いてきたら、猛烈に恥ずかしさがこみ上げてきた。

いくら、異世界人といえども、男の人を風呂待ちさせるなんて、数十分前の私は何を考えていたのか。いたたまれなくなって、視線を床に向け、鏡に置いた足先を、曲げたり伸ばしたりしてみるが、状況は変わらない。だんまりを決めこむ。

「こちらを向け、ユウキ。それが、人を待たせた者の態度か？」

正面から、威圧的な空気が漂ってくる。ライが名前を呼んだら、危険信号なのだ。そろそろと、窺うように、黒曜石のような瞳を覗きこむと、彼は切れ長の目を細めた。強い視線に圧倒され、闇色に囚われる。何か閃いたのか、口元を楽しげに歪めて、さらに顔を寄せてくる相手に、為すすべもない。

「なぜ、何も言わない。風呂に入るからここで待て、とは。もしや、私を誘っていたのか？……残念だな。隔てるものがなければ、存分に可愛がってやれたものを」

色気をふんだんに含んだ低音が、耳朶をくすぐった。薄い唇に笑みをのせ、妖艶な雰囲気を纏い、濃い空気を生み出す。ぎゅっと心臓が収縮する。じっと、目の奥まで見通すような視線に、背筋がぞくっとした。反射的に、両手を後ろについて、ライと距離をとる。

「ち、違うわよっ！そんなことあるわけないでしょ！ちゃんと説明するから、そのはた迷惑な空気出すのやめなさいよ！」

顔を真っ赤にし、鏡に勢いよく手をついて言い放つ。ライは、からかいを含んだ視線をよこし、口元に手を当てて、くくっと、のどを震わせている。完全に遊ばれている。免疫のない私をつかまえて、おもしろがっている。本当に腹立たしいことこの上ない。

おもしろがりながらも、説明を求めてくるライに、しぶしぶ、ホラー映画のくだりを話す。向こうには、映画がないようなので、劇のようなものだと説明した。途中、呆れ顔になったり、笑いをこらえたりしている美貌の青年に、怒りの視線を浴びせながら、お風呂のところまで話し終えた。

「お前がそんなに恐がりだったとは思わなかったな。私を見たときは、そんなに恐がってなかっただろう。というより、咬みついてきていたよな」

新しいおもちゃを見つけた子供のように黒い瞳をきらめかせている。いやな予感しかいない。一番弱みを見せてはいけない人に、弱みを握られた気がする。

「ライの存在感がありすぎて、幽霊じゃないって思ったから大丈夫だったの！」

そうだ、でないとあんなに喧嘩ごしの発言ができるわけがない。仮に、幽霊だったとしても、絶対認めないが。

「それはそうと、幽霊とはなんだ」

意外な質問にライの方を見やると、鏡の向こうで、あごに手をあてて、首をかしげ、不思議そうな表情をしている。

「えっ、そっちって幽霊いないの？日本では、魂という概念があってね。死んで肉体がなくなっても、魂はなくならないって言われてるの。未練の残っている人とかが魂だけの姿で現れるのが、幽霊！」

何やら思案顔をして、真摯な視線をこちらに返してきた。何か、思うところでもあったのだろうか。

「こちらでは、死ぬということは、跡形もなく、消滅することだ。そういう考え方もあるのだな」

幽霊の説明をしたつもりなのだが、ライは、違うところに引っかかったようだ。こちらの概念を柔軟に受け止めようとするところには好感が持てる。

しかし、今日のことを話したおかげで、ばっちり、ホラー映画の内容を思い出してしまった。幽霊の話題も大変よろしくない。恐怖がじわりと、よみがえってくる。だめだ、今夜は、一人で寝れる気がしない。だが、ライを付き合わせるわけにもいかない。

「あのさ、正直、今日恐いから、目隠しなしで寝てもいい？プライベートな空間だから、視界くらいは塞がないと、とは思うんだけど、今日だけお願いっ！！」

両手を合わせて、しっかりと、目を見て拝んでみる。これだけは、切実に承諾してほしい。じっと、念を込めながら、漆黒の瞳を見つめ続ける。

「お前は、幼子か。もう、寝るまで、ここにいてやるから、さっさと寝ろ」

大きくため息をついて、前髪をかき上げ、私のうしろにあるベッドを指差す。予想外の返答に、目をむいた。

「そ、そこまで求めてないんだけど！？むしろ変な緊張で眠れないっ！」

どうしてこんな展開になった。私は、バスタオル撤去をお願いしただけだ。安眠妨害反対。

「つべこべ言うな、ユウキの分際で。は、や、く、寝、ろ」

結局、凡人は、類稀なる男の圧力に屈しなければならないのか。長いものには巻かれろ、ということか。掛け布団をひきずって、ベッドに入る。

横になってまるまると、こちらを眺めるライと目が合った。鏡にもたれかかるようにして、目を細め、笑みを浮かべている。胸の前でぎゅっと拳を握った。心音が早まって、ライの視線から逃れるように、目を閉じた。

全ての元凶はホラー映画です（後書き）

ここまで読んで頂いて、ありがとうございます^^　ホラー観た後ってお風呂の鏡恐いですよね？

気づかないふりをしてもいいですか

ホラー映画の一件があってから、着替えなどの時以外は、鏡にバスタオルを掛けなくなっていた。もともと、ライ側からは、目隠しがされていなかったので、私の裁量で決まるのだ。寝顔もばっちり見られただろうし、いろいろとあきらめがついた。ラグですべって転んで、そのままごろごろ戯れて、その挙句に、うとうとし始めるといった一連の流れも、呆れた冷たい視線と共に、きっちり見届けられたりしている。

「あ、ライー。おかえりー」

帰ってきた気配に、鏡の方を向いて声をかける。お互い、「おかえり」と「ただいま」は、相手の言葉でわかるようになった。

「ああ、ただいま、ユウキ」

不思議な旋律に疲れが滲んでいる。足取りも重そうだ。寝ころんでいたベッドからおり、鏡へ向かうと、ライも同じように寄ってくる。顔色をうかがいながら、鏡に触れる。

「すごくお疲れのようだけど、なんかあったの？」

「いや、たいしたことはない。光の加減か何かじゃないか？」

ライは、とにかく弱みを見せたがらない。それは、徹底していて、何食わぬ顔をして、追求をかわしてしまう。何かあったかまではわかるが、それが何であるかは、絶対に悟らせない。それだけ気の許

せない環境で生活しているのだろうが、私にくらい、話して息抜きをしてもよいと思う。向こう側と接触できない私なら、話してもなんら影響はないのだから。

このあいだ、話すだけでも楽になると思う、と言ったら、お前には関係ない、と返された。全くその通りなので、それ以来その話題は出していない。拒絶の空気を強く感じるときは、触らぬ神に祟りなし、だ。本当は、気になって仕方ないが、押しつけるのもよくないし、もし、ライが話そうと思ったら、真剣に聞ければいい。

「うーん、そっか。ライの部屋いっつも薄暗いからなぁ」

きっとそのせいだな、と少し笑いながら、うなずいて見せる。

「薄暗いとは失礼だな。夜の寝室なのだから当たり前だ」

疲れた表情を消して、いつもの皮肉げなライに戻る。もしかしたら、この鏡が繋がる前は、この部屋だけが、気を緩めて一息つける場所だったのかもしれない。出会ってから、それほど経ってはいないが、毎日のように話してきて、彼が他の誰かに気安く弱音をはけるタイプとは思えない。彼の癒しの場を私が奪っているのではないだろうか。そこに思い当たると、すっ、と心が冷えた。

「ねえ、やっぱり、いつもは、目隠しつけようか」

なんでもないように口元に笑みを浮かべながら、さりげなく、目を伏せ、視線を足元に向ける。

「どうした、急に。お前、恐がりだろ。どうせすぐに外すことになるんだ。無駄なことはやめておけ」

うつむいた頭ごしに、落ち着いた低音が伝わってくる。ライの顔は見れなかった。もし、提案を受け入れられていたら、ひどく落胆していただろう自分を強く自覚させられたから。詰めた息をふうっ、と吐きだす。

「……ううっ、反論できない」

心の内側にふたをするように、大げさにうなだれると、ライが笑う気配がした。

なぜこの鏡は声だけを届けるのだろう、と思う。触れられるのは、結局、自室の鏡だ。私とライとの間には、とてつもなく、途方もないくらいの壁が立ちはだかっている。

ときどき、ライと話していると、触れている鏡の硬い質感と、ひんやりとした冷たさが際立って、身体にしみわたる心地がする。このある意味、不毛とも思える交流の温度のような気がして、心の奥が疼く。

つきつめていくと、ライという存在をしっかり実感したいと思っている自分がいて、私が思うよりも、ライは私の中に深く、くいこんできている。自覚しつつも、それを片隅に追いやって、逃れようとするのは悪あがきなのだろうか。

ライの節高く長い指を鏡越しに眺める。

触れられない。それがひどく重い枷となっている。無駄なのだと、この言葉だけの繋がりは、繋がりのように見せかけて、いつか簡単に切れてしまう糸なのだと、眼前につきつけられている気がした。

気づかないふりをしてもいいですか（後書き）

読んで頂いて、ありがとうございます＾＾パソが占領されてしまい、最後らへんは携帯でちまちま。友希はうじうじ。

侍女さんたちの視線が痛いです

どうしてこの鏡は繋がってしまったのだろう。繋がらなければ知らなかったのに。しかし、繋がらなければよかった、とは思えないほど、この状況に、ライの存在に、慣れきってしまった。

「このままじゃ、まずいなあ」

うーん、と天井に向かって、伸びあがる。ふと、視線を感じて、鏡の方に振り返ると、ライの部屋を掃除に来たと思われる侍女さんたちに凝視されていた。彼女たちは、私に気づかれたとわかると、そそくさと、業務に戻っていく。今、何かおかしな行動をしていたのだろうか。伸びていただけだ。向こうの人々にとっては、奇妙な行動だったのか。

最近、侍女さんたちの視線を浴びることが多くなってきて、少し戸惑っている。珍しい動物を観察しているような眼差しに、正直あまりいい気分はしない。目が合ってしまうと、みな同様に掃除を再開してしまうので、彼女たちに気づかれないように、こちらからもこっそり観察してみたりもした。

大半が、奇妙なものを見る目だったと思う。動物園のパンダの気持ちが少しだけわかった。ただ、笑顔ではなく、だいたい、いぶかしげな表情だったので、居心地の悪いことこの上なしだが。

印象に残ったのは、こちらを鋭い視線で睨みつけていた侍女さんだ。私の思い違いでなければ、その時が初対面だったはずだ。恨みを買おうにも、接触したこともないし、むしろできないので、私のなにがそんなに気に障ったのか全くわからなかった。

「このまま見られ続けるんなら、バスタオル復活かなー」

その夜、日付が変わるころ、ライが部屋に帰ってきた。お酒のボトルとグラスを持って、鏡の前にやってくる。その、ほぼ習慣化している様を見て、少し心が浮き立つ。いや、浮き立つな私。それにしても、ボトルごと持参とは珍しい。

「今日もお疲れ様。あのさ、最近、ライんとこの侍女さんたちに、やたらと観察されてる気がするんだけど。なんでなのか知らない？私、まったく心当たりないのよね」

なにかあったのか、と聞くと、かわされるのは、もう何回も経験済みなので、あえて、自分の要件を伝えてみる。ライは、こちらをちらっと見て、視線をそらした。両目を細め、薄い唇に揶揄の笑みを乗せる。

「お前に観察する価値などあるのか。珍妙な動きはおもしろいが」

「なっ！あんたねっ！いつも思うけど、その口の悪さなんとかしなさいよっ！」

バンバンと、鏡を激しく叩く。そこに正座しろ、と言いたい。小一時間みっちり説教してやりたい。円滑な人間関係のための第一歩、笑顔もまったくなっていない。いや、この男の場合は、笑顔はいらない。にこやかな笑顔など、恐すぎて想像できない。自分で自分の寿命を縮める結果になりかねない。

目の前で、にやっと笑っているライに、はっと我に返る。面白がられている上に、絶対、誤魔化された。いつもしてやられているが、

今日はとことん追求してやろう。気遣いなど、どぶに捨ててやる。

「ライ。あんた、理由知ってるんでしょ。さっさと吐け！結構居心地悪いんだからね！」

ぐっと、目に圧を込めて、ライの黒い目と視線を合わす。ライの周りの空気が重くなる。漆黒の瞳に鋭さが宿り、一気に威圧感が増す。どうしても言いたくないのか、鋭利な気配を漂わせている。負けてなるものか。私が観察対象になっている理由を聞いているのだから、関係ないとは言わせない。じっと、目をそらさずに見つめ続ける。

「……お前は、人に言う前に、自分を省みろ」

はあっ、と知らず詰めていた息をはく。この勝負、多分勝った。高圧的な雰囲気に屈しなかった自分を褒めたたえたい。人外な美貌に睨まれるのは、本当に恐かった。慣れてきたとはいえ、あまり、味わいたくないものだ。

ライも、眉間にしわを寄せ、心底嫌そうな表情をして、大きく息をついた。

「そんなに知りたいのか」

「うん、知りたい」

当たり前だ。恨み混じりの視線もあるし、なぜ観察されているのか知りたいに決まっている。目線で促すと、ライがグラスの中身をあおった。少し間が空く。

「おそらく、お前が、侍女たちに観察されているのは、ユウキ……
お前が私の女だと思われているからだ」

侍女さんたちの視線が痛いです（後書き）

読了お疲れ様です。そして、ありがとうございます^^　繋がれないサブタイトル。

面倒なことになりました

「はぁ？」

目が点になった。話が飛躍しすぎてついていけない。口をぽかんと、開けた私に、ライは、眉間のしわを増やし、唇を歪めた。黒曜石の瞳は手元のグラスを眺めている。

「一体、何がどうなってそんなことに……」

「知らん」

「はい！知ってるくせに嘘つかない！」

即答で返してくるライにすばやくつっこみを入れる。それにしても、どうしてそんな誤解が生まれてしまったのか、本当に謎だ。

「……私が鏡の中に女を囲っているという噂が広まっているらしい」

「ええっ！？なにそのいかがわしい噂！ていうか、そんなことできるの？」

ライは、心底、心外だというふうに、顔をしかめている。

「やろうと思えばできるが、私にそんな趣味はない」

やろうと思えばできるのか。背筋が寒くなり、少し後ずさる。鏡の中に人を囲えるとは、どういった原理なんだ。ライの話から向こ

う側の人々が、魔力を持ち、魔法を発動できるというファンタジックな技能をもっているのは、すでに知っている。侍女さんたちも、魔法で掃除などをしているようだ。だが、知っているのと、実感を伴って認識しているのとは、別物である。

魔力が、こちらの電気のような動力源にあたり、魔法が、機械みたいなものかな、と思っていたので、鏡の中に人を囲うことができるという発言には、衝撃を受けた。こちらでは、実現不可能なことが、あちらでは、実現できてしまうのだ。こういう時、ライは、やっぱり異世界の人なんだな、と実感する。

私が、異世界間ギャップにショックを受け、思案に沈んでいる前で、ライは、手のひらで目を覆い、疲れたようにため息をついている。

「で、今日、ライがそんなにお疲れなのも、もしかして、それ関連だったりする？」

「違う」

やっぱりそうか、と、一人でうなづいていると、何かにあきらめがついたのか、ライが、額に手をあてながら、心持ち低い声で、ぼそぼそと話し始めた。

「周りの奴らが、そろそろ妃の一人でも娶れとうるさくてな。私が、政務を終えたあと、おとなしく自室に帰るなどおかしい、から始まり、夜、自室に誰も入れたがらないのは誰かと密会しているからだ、となり、その上、度々、鏡の中にお前が現れるから、侍女たちが、お前を密会相手だと勘違いしたようで、面倒なことこの上ない。いっそのこと、お前を妃としてはどうだ、という意見まであるな」

ライは、ちら、とこちらに目線をやり、大きく息をつくと、前髪をかきあげ、お酒をあおっている。私たちは、普通に異世界間交流をしていただけだ。密会などという怪しげな会を開いたことなどない。しかも妃ってなんだ。薄々感づいてはいたが、やっぱり、ライは、王やら皇帝やらというやつだったか。さらに私を妃になど、無茶振りもいいとこである。

それにしても、侍女さんたちの視線の理由は、これだったのか。あの侍女が、恨みを込めて睨んできていたのは、私がライの妃になるかもしれない女だと思ったからだ。きっとライのことが好きなのだろう。納得がいった。ありえないから安心しろ、と言いたい。私なんて、ライと同じ世界にいる彼女と、同じ土俵にあがることすらできない存在だ。

「ほんとに、めんどくさいことになってるわね」

つっこみどころがありすぎて、どう返せばよいのかわからなかったので、率直な感想を述べる。

「本当にな」

実感のこもったライの言葉の余韻を残して、二人の間に沈黙が落ちた。ひた、と鏡に手をのせ、その冷たい感触を味わう。こんなに近くに見えるのに、とてつもなく遠い。

「……私たち、触れたこともないのにね」

「……本当にな」

鏡越しに視線を交わしあう。見慣れた漆黒の瞳を、じっと見つめ続けた。ライも静かな目でこちらを見ている。

「……っふふ」

ふいにおかしくなってきて、笑ってしまった。笑わなければ、なんだか泣きそうだった。その声に、ライも夢から覚めたように目を見張ってから、足元に目線を移し、ゆるやかに口の端をあげる。

「まあ、侍女たちには、それとなく言っておこう」

さきほどまでの空気をとりなすようなその言葉で、少し切なさを孕んだ今夜の、向こうの人々いわく密会、はお開きになった。

面倒なことになりました（後書き）

ここまで読んで頂いてありがとうございます＾＾ただいま、サブタイトルを考え直し中。行き当たりばったり感満載でお届けしてます＾＾；

ホラー苦手なのに惨劇に遭遇しました（前書き）

そんなに激しくないですが、残酷な表現があります。苦手な方はご注意ください。

ホラー苦手なのに惨劇に遭遇しました

ライがたしなめてくれたのか、あれ以来、あからさまな視線を感じることはなくなった。いつも通り、ライと語らい、明日も早いからと、お互い早々に床についた。

――――――――ガシャアアアァァ

「……っ！？」

夜中、けたたましい何かがなぎ倒されたような激しい物音に飛び起きた。びっくりしすぎて、ベッドの上で目を見開いたまま、つかのま硬直してしまう。なんとか身体の緊張を解いて、状況を把握しようと、あたりを見渡す。薄暗い室内に恐怖が湧く。すばやく明かりをつけ、もう一度部屋を見渡す。と、また凄まじい音があたりに響いた。

鏡からだ。

向こうで何かが起こっている。身がすくんで動けない。自分で自分を抱きしめながら、じっと、鏡の向こうに目を凝らす。とても暗い。こちらが明るいのでよく見えない。ひるむ心に鞭を打って、そろそろと、鏡の方へ向かう。そっと両手をついて、おそるおそる鏡の向こうを覗きこむ。

視界の範囲には誰も見当たらない。だが、ふかふかの絨毯には、原型が何かわからない破片があちこちに散らばっている。

「ライ……？」

姿が見えないが、どこにいるのだろう。あの、激しい物音の中、寝ているとは思えないが。ライを探すために少し、身体をずらす。

瞬間、凄い勢いで何かが視界を横切った。強烈な破壊音が響く。

反射的に、びくっと身体が震え、ぎゅっと目をつぶる。一体なんだというのだ。視認できない早さで何かが吹っ飛んでいった。開くのを拒否している瞼をこじあける。

「っ……！？」

暗い赤の色彩が目に飛び込んできた。認識した途端、息がのど奥に詰まる。人の血と思われるものが、鏡に飛び散っている。おぞましさのあまり、その場にへなへなと座りこんでしまった。

「な、なんなのよっ。どうなってるのよ」

情けない声が漏れる。人間、経験したこともないことに唐突に、遭遇するとどうにもできない。しかもこっちは、生まれてから平和に浸かりきった生活を送ってきているのだ。目の前に飛び散った血痕に放心するしかなかった。視線を向こう側にやったまま、混乱から抜け出せないでいると、視界の端でなにかが蠢いた。

不自然なほど身体を跳ねさせながらも、そちらに視線を移す。薄暗闇の中で、床に両手をつき、這いつくばった身体を、緩慢に持ち上げている男がいる。衣服は破れ、男自身も相当、傷を負っているようだ。うなだれているため顔は見えない。

すっと、気配を感じさせないたたずまいで、いつのまにか、そのすぐ横に立つ男がいて、ぎょっとする。鏡越しでもわかる静かで冷徹な空気を纏っているその男は、ひどく傷つきながらも起きあがろうとしている男を無表情で冷然と見下ろしている。温度のないそのさまに怖気立った。

深手を負った男は、すぐ横の存在に気づいたのか、弾かれるように顔をあげた。その急激な動きにつられ、そちらを見やると、男と目が合う。瞬間、何を思ったのかこちらに向かって走ってきた。ぎょっと、身体が堅くなる。髪を振り乱し、すごい形相で迫ってくる男に、身体が動かず、逃げたいのに逃げられない。恐慌に陥る。

「あ、ぁ……」

喉から悲鳴が押しつぶされたような声が出る。目前に迫る男。目が血走っているのが確認できる。刹那、男の身体が、強烈な圧力でもって、鏡に叩きつけられた。

眼前の凄まじい惨状に、私の意識は臨界点を突破し、弛緩した身体はその場に崩れ落ちた。

ホラー苦手なのに惨劇に遭遇しました（後書き）

読んでいただいてありがとうございます^^昨日はダウンしてました。寒いので、皆様も、体調にはお気をつけくださいね^^

遊びにもなりませんでした　ライｓｉｄｅ（前書き）

友希ｓｉｄｅより、若干、残酷な表現があります。苦手な方はご注意ください。

遊びにもなりませんでした　ライside

人が心地よく眠っていたら、一匹の賊が侵入してきた。私の護衛たちは何をしていたのか、甚だ疑問であるが、とりあえずは目の前の敵に意識を向ける。最近、執務ばかりで身体が鈍っている気がするから、少し遊んでやろう。知らず、口の端があがる。

頭上から、鋭い氷柱が降ってきた。立て続けにベッドのシーツへと突き刺さる。ふかふかと、足場が悪い中、降り注ぐ冷たい矢を、魔力を使わずに避けていく。これが火系統の魔法だったら、ベッドが燃えてしまうため、即座に打ち消していただろうが、とりあえず、寝ていた身体を起こす準備運動だ。

すべて避け終わると、ベッドが剣山のようになっていた。軽くベッドのうえから飛び降り、相手をしてやろうと、賊のもとへと歩き出す。人を怪物でも見るような目で見ていた男は、私が近づいて行くのに気づき、なにやらぼそぼそと唱え出した。この男は馬鹿以外の何物でもない。敵を目の前に悠長に詠唱開始とは、片腹痛い。

先ほどの攻撃で男を見るまでもなく、水系統なのはわかっていたので、詠唱の内容に耳を澄ましてみる。氷の攻撃なら、再度、運動しようかと思ったが、大量の水が降ってきそうな気配がしたので路線変更だ。起きぬけに濡れ鼠は勘弁願いたい。

術式が完成するまえに、軽く地を蹴り、男の目の前に移動する。瞬間、男が驚く暇も与えず、左腕を振りあげ、なぎ払う。

――――――――　ガシャアアアァァ

丸い小さいテーブルを巻きこんで、男が壁まで吹っ飛ぶ。詰まったような鈍い声が男からもれる。花瓶も派手に割れてしまった。きき腕を使わなかった分、逆に力の加減を間違えてしまったのだろうか。多少、防御くらいしてほしい。遊びにすらならないとは、小物もいいところである。つまらない。

一息吐いて、やっと立ちあがった男の右横に移る。間髪入れず、左足で軽く蹴り飛ばす。直接、壁にぶち当たり、跳ね返って床に転がった。たった二撃しか与えていないのだが、男は、なぜか血に塗れている。私を襲おうというのなら、もっと修行なり、なんなりしてこい。あと、一人で来るな。人の睡眠時間を削っておいてこのざまとは、冗談ではない。私の睡眠時間を返せ。

男が必死に立ち上がろうとしているのを無表情で眺める。相手の力量も見極めずに襲ってくるとは、愚かに過ぎる。そろそろ緩慢さに苛立ってきた。音もなく男の左側に立ち、すっと、片足を持ち上げる。

男の背中を踏み抜いてやろうとした瞬間、今までの鈍さは何だったのか、という素早さで男が駆け出した。何か楽しいことでもしでかしてくれるのかと、視線をやると、男が走ってゆく先に、ユウキが見えた。あいつは、こんな時間に何をやっているんだ！激しい物音をたてて遊んでいた自分を棚にあげて悪態をつく。

凄まじい勢いでユウキに向かっていく男を見て、かっ、となった。すぐさま、ユウキの前に防御壁を張り、純度の高い魔力を練って、男の背中目がけて叩きつける。防御壁と魔力の板挟みになった男の身体は、激しい衝撃と圧力に耐えきれず、見苦しく押しつぶれた。防御壁には血がべったりとついている。

「大丈夫か！ユウキ」

崩れ落ちた男に目もくれず、ユウキのもとへ向かう。防御壁を解き、鏡に手をついて覗きこむと、気を失って、倒れこんだ彼女が目に入った。攻撃がユウキにも当たってしまったのだろうか、と一瞬焦るが、防御壁は完璧だった。それに、この鏡がある限り、あり得ない。鏡に置いた手を見て、その事実に気づかされる。

この鏡は音以外通さない。頭に血がのぼった瞬間、そのことが、すっかり頭から抜けていた。鏡越しに青白い顔色のユウキを見つめながら、口元には苦笑が浮かぶ。

目の前で、女子供には、かなりきついものを見せてしまった。本当は触って確かめたいが、見る限りでは外傷はなさそうだ。目覚めるまで側にいようと思い、ゆるゆるとその場に座り込んだ。

「あまり、私を恐れてくれるな」

せっかくおもしろそうな遊び相手が見つかったのだ。ユウキには、ユウキのままで居てもらわなければ、張り合いがない。生き生きとした反応が返ってこなければ、意味がないのだ。

それにしても、この部屋の惨状はいただけない。この男の魔力は、まずそうだし、侍女たちに処理を任せよう。ユウキが目覚めたときに、恐れを抱かせるようなものは、なるべく排除しておく必要がある。侍女を呼び、掃除を頼む。

うしろで働く侍女たちの気配を感じながら、こつ、と頭を鏡にもたせかける。意識のない彼女は、おもしろくない。静かに横たわる

ユウキの伏せたまぶたを眺める。ころころとよく変わる表情や、いつもの咬みついてくる様子を思い浮かべた。われ知らず、口の端がゆっくりとひきあげられる。

「早く、目を覚ませ、ユウキ。私を失望させてくれるなよ」

遊びにもなりませんでした　ライside（後書き）

読んで頂いてありがとうございます＾＾ライは興味ないと冷酷なようです。男がやられるところ、あんまりなまなましくは、してないつもりですが、大丈夫ですよね……？自分ではわからないー。

飛んで火に入る私です（前書き）

ちょっとだけ、残酷な表現がありますので、お気をつけください。
ライｓｉｄｅのがいけた人は大丈夫だと思います＾＾

飛んで火に入る私です

凄まじく恐ろしいなにかを見たような気がする。今まで生きてきた中でも一番におぞましいものを眼前につきつけられた。

暗く沈んだ意識の内側をふわふわと漂っている。意識が勝手に先程の映像をなぞってゆく。自動再生されるフィルムに私は抗うすべもない。少し離れた場所から無理矢理、見せられているようだ。

床に倒れ、必死に立ち上がろうとする傷ついた男のすぐ側に温度を纏わない男が立つ。凍てつく視線を、はいつくばる男に注いでいる。

「……っ！！」

背筋がひやりと凍りついた。冷たい汗が滑り落ちていく。

ライだ。

存在そのものを否定するような侮蔑を含む表情をしている。さっきは気がつかなかったが、ライに意識が集中していたせいか、傷つき、血にまみれた男を背中から思い切り踏み抜こうとするところがはっきりと目に焼き付いた。

いつもからかい混じりで私と対しているライの中にあるひどく残忍な一面を見せつけられ、呼吸が浅くなる。吸い込んでも、吸い込んでも、空気が肺まで行き渡らない心地がした。

溺れるように喘ぐ私の目の前で映像は再生され続けている。髪を振り乱し、気が触れたように走ってくる男の後ろに焦点は合わさったままだ。

男につられてこちらを向いたライは、目を見開き、幾分かその身に温度を取り戻したように見えた。瞬間、眼光に凄味を帯びて、目に見えないなにかを、男に向かって打ち出したようだった。

意識を現実から引き離した空恐ろしくも惨たらしい場面がくる。いやだ。あんなもの、一度で十分だ。目を閉じたい気持ちでいっぱいなのに閉じられない。さっきまで、ゆらゆらと漂っていたと思ったのに、逃げたいと思った時に全く動けないとは、どうなっているのだ。何かに縛られたように身動きがとれない中で、必死にもがく。こわい、こわい、こわい。

「……キ」

何かが鼓膜をかすった。そのかすかな音が、聞き慣れた低音だと認識した瞬間、意識の海から、急速に引き上げられる感覚に襲われた。

「……っは！うぅ」

鋭く息を吸って、弾かれたように目を開く。柔らかいラグの感触が頬から伝わる。心臓が物凄い勢いで動いていた。現実世界に戻ってこられたようだ。べったりと背中に汗をかいている。溺れかけたような荒い息を整えようと、深く息を吐いた。ゆっくりと身体を起こすと、目の前に心配そうな顔でこちらを見ているライがいた。

「ユウキ」

鏡に両手をついて、眉を寄せながら、こちらを覗きこんでくる。いつものライだ。表情にきちんと感情が乗っているのがわかる。ほっとする反面、心の内には、残虐な行為を平然とやってのける彼の姿も焼きついている。

いま、私の心配をしているライと、冷たく凍てついた気配を纏ったライ。

きっと彼は、意図して、その一面を見せなかったのだ。私が聞いても何も答えない時は、そういった側面が絡んでいたのかもしれない。私はとても平和な世界に生きていて、殺伐としたものとは無縁だとライには一目でわかっただろう。私に、ライの世界の残酷な面を隠して見せなかったのは、優しさ、と言えるものだったのかもしれない。

しかし、ライの中で、私は対等な存在ではない。そのことが、とても悲しい気持ちにさせた。ライに手加減されている。その事実に、思うより深く傷ついている。もちろん、あの思い出したくもない惨状を作り出したライを、何の葛藤も恐れもなく受けとめることはできない。震えそうになる身体を、両腕で抱きしめる。できないが、それをライにはじめから見積もられていたことに、私が、その彼にとっては日常である残虐性に耐えられないと、ライに思われていたことに、ひどく胸が詰まり、気持ちが沈む。

「ユウキ！」

悔しさと悲しさで、自分自身を抱きしめながら、うつむいていた私に、ライが、どうかしたのか、という風に私の名を呼ぶ。私を気にかけるライも、冷酷に敵を排除するライも、彼自身だ。そう噛み

しめるように心に刻んで、なにかに負けそうになるのを振り払うように、ライの漆黒の目と視線を合わせた。しっかりと、黒曜石の瞳を見つめると、彼は、その薄い唇をゆるゆるとひきあげた。その嬉しさと、酷薄さとを含んだ笑みに目を奪われながらも、私は、踏み込んではいけない領域に今、確実に一歩踏み出した自分がいることをひしひしと感じていた。

飛んで火に入る私です（後書き）

１３話目読了ありがとうございます＾＾どうしようか悩んでいたら、間があいてしまいました。すみません＾＾；タグにほのぼの入れてるの間違ってる気がしてきました。ほのぼのしてないよー。

どうしてこうなったのでしょう

搦め捕られそうな感覚から、ふと、鏡に置かれたライの手のひらに視線を移す。長く節高い指にいくらか力が込められているのか、先が少し赤い。あの指には本当に血が通っていて、ぬくもりがあるのだろうか。触って確かめてみたい。温かいのか、冷たいのか、なんでもいいから、ライの体温を感じてみたい。

目線を上げると、ライが眉をひそめ、こちらをじっと見つめていて、早く鏡に手をつけ、とでも言いたげにしている。指先にまた少し力が加わったのか、赤みが増している。あの赤と同じところに触ったら、なにか感じられないだろうか。もし、ライの温度をこの手で感じることができたら、胸に巣くう恐怖や、困惑、悲しみ、憤りなどドロドロとしたものが入り混じった複雑な感情が、少し落ち着くような気がする。

食い入るように見つめてくる漆黒の瞳に、吸い込まれそうな錯覚を覚え、その引力に導かれるままに、そろそろと、赤味を帯びた指先に手を伸ばす。鏡の上から、ライの指先に、ひたり、と自分の指先を合わせる。

瞬間、ぐっと、指先に圧がかかった。いつもの冷たい鏡の感触ではない。

「えっ？」

思わず声が出た。目の前に、目を見開いて、合わさっている指先を凝視しているライがいる。反射的に指先を離そうとしたが、ライ

の方が一瞬早かった。向こう側から、ぬっと手が伸びてきて、引こうとしていた私の手首を、きつく握り、ぐっと、勢いよく引っ張られた。

「うわっ！？」

眼前にせまる鏡面に突っ込む衝撃に備えて、ぎゅっと目をつぶる。予想していた激痛は訪れず、直後、大きな何かに包み込まれる感触がした。さわやかな柑橘系の香りが鼻腔をくすぐり、かたく緊張した身体を少し緩める。

「ユウキ、大丈夫か」

ごく至近距離から聞こえる低音に、はっと我に返り、目を見開く。ライに手首を掴まれたまま、腰をしっかり抱きよせられている。頬にはライのかたい胸板の感触。生々しい体温が伝わってくる。

「ぅえええっ！？な、なんであんた！え？え！？」

「とりあえず落ち着け、ユウキ」

私の手首を離し、その手で頭を抱え込んで撫でてくる。いやいや、落ち着けるかっ。しかも、なんだ、この体勢は。

「や、は、離してっ、ライ！落ち着いたから。もう、落ち着いたから！！」

ぐいぐいとライの胸を押し返す。よりによってこの男なぜガウン着用なのか。確かに体温感じたいって言いましたけど、ここまで求めてません。

がっちり腰をホールドされているのか、力いっぱい抵抗しているのに、全く動かない。上から微かに笑う気配がして、睨んでやりたいのに、後頭部も手で押さえられていて、口でしか応戦できない。

「はーなーせーっ！！」

叫んだ瞬間、ぱっと、後頭部を抱えていた手が離され、ライは楽しそうに黒々とした目を輝かせながら、両手で私の腰を抱えなおした。ライと、ぐっと密着することになり、顔に血がのぼる。遊ばれているのは、わかっているのだが、いかんせん、この超絶美形な顔との距離が近すぎる。

「なんで、あんたはそんなに落ち着いてんのよ」

「お前には落ち着いてるように見えるのか。こんなに気分が高揚するのは久しぶりだ」

整った顔に綺麗な笑みを乗せ、囁いてくる。確かにとても機嫌が良さそうではある。しかし、私の心臓が限界を訴えてきているので早く離してほしい。こんなに早い心音は今まで聞いたことがない。

思い切りもがいて訴え続けたが、ライが満足するまで離してもらえず、結局私の体力だけが無駄に削られた。肩で息をする様子をまた興味深げに目を細めて観察してくるのだから、たちが悪い。

呼吸が整い、落ち着いて周りを見渡すと、紛れも無く、いつも覗いていた鏡の向こう側の世界が広がっていた。ふかふかの絨毯に、豪奢な飾り棚があって、到底一人用とは思えないくらいの大きさのベッドが置かれている。後ろを振り向くと意匠を凝らした大きな鏡

の向こうに自分の部屋が見えた。どうやら、本当にライの世界に来てしまったようだ。

「……一体どうなってるのよ」

どうしてこうなったのでしょう（後書き）

ここまで読んでいただいてありがとうございます^^

本当に繋がってしまったようです

とりあえず、落ち着いて考えてみよう。ライと私の指先が同じところに触れた瞬間に、空間が繋がった気がする。私は多分、いや確実に、この鏡を通って来たのだと思う。何の抵抗もなく、すんなりとこちらの世界に来ることができた。だとすれば、鏡を媒介に、あちらとこちらの世界が繋がった、と考えていいのだろうか。少し嫌な考えが浮かんだが、見なかったふりをして、心の奥底に沈める。

「ねえ、この鏡通って来たのよね、私。ってことは、ライと私の部屋が行き来できるようになったってことなのかな……？」

少しでもましな可能性にかけて、問いを発してみる。

「その鏡が繋がってれば、そうなるな。だが、お気楽なお前には、帰れないかもしれんという選択肢はないのか」

ライはにやにやとひとの悪い笑みを浮かべて見下ろしてくる。人がせっかく見ないふりをした可能性を掘り返さないでほしい。

「もとはといえば、ライが引っ張るからでしょ！ほんとに帰れなかったらどうすんのよ！恐いこと言わないでよね」

不安な心を隠すように、ライを睨みつけ、悪態をつく。鏡に触れて、確かめるのが恐くなってしまった。しかし、確かめなければ、帰れない。あんなに簡単に来れたのだから、帰りもすんなり返してください。お願いします。鏡に向かって、目を閉じて両手を合わせる。

「私はそれでも一向にかまわないが。ユウキ一人ぐらい余裕で養ってやれるぞ」

ライは後ろで、腕を組み、私が鏡に祈っているのを物珍しげに眺めながら、とんでもないことを言っている。そんなことになってたまるか。向こうに私の部屋が見えているのだから、絶対に帰れるはずだ。よしっ、と気合いを入れて鏡の方に踏み出す。

「うっ！」

踏み出した、はずだった。後ろから、ほどよく筋肉のついた腕が巻きついている。長い指に、首からあごのラインにかけて撫で上げられ、ぐっと顔を左に向けられた。すぐ横にライの整った顔があり、漆黒の目を細めながら、薄く笑うさまが見てとれた。解放されたばかりの心臓が、ひと際大きく鳴る。密着しすぎて、心音が聞こえるのではないか、と焦る。

「せっかくお前に触れられるようになったというのに、私が簡単に帰すと思うのか」

色気のある低音が耳元で響く。びくりと身体がはね、顔に血が集まるのが自分でもわかる。さっきも遊ばれたおしたところだというのに、素直に反応してしまう自分がうらめしい。ううっ、と低くうめきながら、ライの醸し出す雰囲気に負けないようにと、鋭く睨み返す。

「もうっ！散々、遊んだでしょっ！冗談やめてよね。私は絶対部屋に帰るんだから！」

腰に回された手を外そうと、前に体重をかけて、もがく。ぱっと

案外あっさり離され、もがいていた勢いそのままに、鏡に突っ込んでしまう。驚き、咄嗟に両手をつこうとすると、鏡面をすっと、通り抜けた。

「わあっ！？」

まぬけな声をあげながら、自室の床にダイブしつつある私の腹にまたもや、背後から手が回された。がしっと受け止められ、状況を把握しようと、見回すと、私の部屋に私の上半身と受け止めたライの右手、ライの部屋に、私の下半身とライの大部分が存在している。鏡に当たる部分には何の抵抗も感じないのだが、身体が半分で分断されたような、微妙に複雑な気分である。

「……とりあえず、引き上げてくれると助かるんだけど」

若干、詰まったような声で訴えると、ライは、喉の奥で笑いながら、右手に力をこめ、体勢を整えてくれた。それにしても、女といえども、人一人の体重を片手で軽々と支えられるとは、相当鍛えられているに違いない。

「大丈夫か。ほんとに危なっかしいやつだな、お前は。まぁ、そのおかげで、私とお前の部屋が、繋がっていて、お互い行き来できそうなことは確認できたが」

ライは、腕を組み、鏡を眺めている。あんたが急に手を離すからだ、と言い返しそうになる口をつぐみ、私は自分の部屋に帰れることに心の底から安堵した。いきなりこの世界に連れ込まれ、向こうに自分の世界が見えているにも関わらず、帰ることができなかったなら、鏡に取り縋って泣き叫んでいたところだ。そんな醜態をさらすことにならずにすんで本当によかった。大きく息をつく。

「てか、ライも行き来できるって、迷惑以外のなにものでもないよね」

「失礼なやつだな。私の何が不満なんだ」

心の声が漏れていたのか、目の前で、ライが眉をひそめている。今までは、接触できないため、人畜無害だったが、実体を持つこの男は危険要素が満載である。なんだか、段々面倒な事態に引きずりこまれている気がする。一度、落ち着いて、この状況について考えたい。

「私、部屋に帰るけど、絶対入って来ないでよね」

不服そうな表情のライに、あまり意味のない釘を刺してから、私は、あちらとこちらを繋ぐ境界線をまたいだ。

本当に繋がってしまったようです（後書き）

読了ありがとうございます＾＾亀更新ですみませんが、まったりお付き合いくださると、とても喜びます。作者が。

私なにか悪いことしましたか

部屋の鏡が異世界と本当に繋がろうが、何しようが、私にはこちらの生活があるわけで、今まで通り、普通に朝起きて、大学に通い、図書館のパソコンの前に座っていたりする。睡眠時間が少なすぎて、というか、寝てないに近いので、意識が朦朧としてくるが、あのまま部屋にいるよりは、いくぶんか気分が楽だ。もちろん今日やろうと思っていた作業は、まったく進んでいない。つと、真っ白な液晶画面を指先でなぞる。

不思議だと思う。あの鏡はなぜあのような段階を踏んだのか。繋がるなら、初めから空間ごと繋がってもおかしくない。むしろ、言葉が通じるのと、空間が通じる条件が異なるのは、繋げようとしている側からすれば、とても効率が悪い。異世界の住人同士が、同時に触れると、言葉が通じ、同時に同じところに触れると空間が通じる。こういってはなんだが、鏡が、私とライのコミュニケーションが深まるのを待っていたような気がする。安全策をとっているとでもいうのだろうか。

「……まさかね。鏡に意志があるわけでもないだろうし」

それより、あの鏡が何を通すのかが、これから生活する上で重要だ。言葉は何故か通じることがわかっているのでよしとする。しかし、私の世界からも、ライの世界からも、誰もが自由に行き来できるとしたら、大問題である。これは、早急に確認をとらなければならない。家に帰ったら、侍女さんたちが私の部屋に、などという事態はできるだけ避けたい。

「何してんのよ。人の部屋で」

意識せずとも押し殺したような低い声が出た。学校から帰ると、侍女さんはいなかったが、もっとやっかいなものが、私の部屋のテーブルに足を組んで座っていた。確かに私の部屋にイスはないが、テーブルの上に腰かけるなど、どういった神経なんだ。それに、私の癒しグッズのラグに土足で踏み入るとは、許し難い所業である。

「おかえり、ユウキ。待ちくたびれたぞ」

「ただいま。じゃなくてね！人の部屋に無断で、しかも土足で入るなんて、どういうことよ！それ、一応テーブルだから、下におりて、ブーツ脱いで！それに私、待ってろなんて言ってないでしょ。入ってくるなって言ったでしょ！」

「ああ、確かに言っていたな。だが、私は了承していない」

子供のような言い訳を口にしながら、テーブルからおりて、ブーツを脱ぐライを半眼になって睨む。ライはその視線をさらっと無視して、鏡の前へ移動すると、脱いだブーツを向こう側へぞんざいに放り投げた。がつっと音がしたと思うと、鏡にはじき返されたブーツが、力を失ったようにラグの上へと転がった。ライも私もしばしの間、そのブーツを見つめる。

「この鏡、なんでも通すわけではないのだな。だが、私が履いていた時は一緒に通り抜けたのだから、私が触れていればいいのか」

ラグの上に横たわっているブーツをつかむと、ライは向こう側に手ごと突き出し、ふわふわの絨毯に置いた。

「つまり、鏡を通り抜けられるのは、基本的に私たちだけってことなのかな」

首をかしげて、思案していると、向こうで勢いよく扉の開く音がした。少し緊張しつつ、誰が入って来たのかと、鏡に注目していると、ずかずかと、鮮やかな赤毛の男が部屋に現れた。燃えるような赤に目を奪われていると、首をめぐらして、何かを探している風な男と目が合った。

「あーーっ！これが陛下の密会相手か。なるほどね。茶髪ってことは地系統なのか。まったく鏡の中に愛人囲うなんて陛下もやるねぇ」

音量の大きな声にびくりと肩が震えた。にやにやと品のない笑みを浮かべながら、男がその笑みにふさわしい言葉を吐いている。その陛下とやらも鏡の前に居るのだから、相手からも見えているはずなのだが、赤毛の男は余裕の笑みを崩さず、こちらへと向かってくる。

体感気温が確実に下がった。間違いなく、横にいる美麗な黒髪の男から発せられている不機嫌オーラのせいだ。ちら、と顔色をうかがうと、眉間にしわを深く刻み、漆黒の瞳には、鋭く冷たい光を宿している。赤毛の男の失礼極まりない発言に私も腹は立つが、ライから漂ってくる威圧感が重くて、それどころではない。向こうの世界ではこのように人を圧倒する気配を常に纏っているのだろうか。男が入って来たとわかった瞬間に、緩んでいた雰囲気がかたくなった気がしたのだが、多分気のせいではない。

「お前、何しに来た。俺の神経を逆なでに来ただけなら、さっさと持ち場へ帰れ」

地の底から響いてきたのではないかと思うほど、太くて低く凄みのある声が、すぐそばから発せられた。自分に向かってではないとわかっていても身がすくむ思いだ。

「何言ってるんですか、陛下。職務放棄しているあなたに宰相が怒り狂って、五秒以内に探して連れ戻して来いって言われたんですよ。女にかまけるのもいいですけど、俺に、とばっちりがくるんですから、ほどほどにしてくださいよ。早くそこから出てきてください」

赤毛の男は、日頃から慣れているのか、ライの高圧的な態度を、ものともせずに、鏡面をばしばしと叩いている。そういえば、男の手は、鏡を通り抜けないようだ。どういう仕組みかは全くもってわからないが、とりあえず私とライだけが行き来できると思っていいだろう。内心胸を撫で下ろす。

夕方に私の部屋にいるから、めずらしく執務が早く終わったのかと思いきや、抜け出してきていたとは、手のかかる陛下である。このやっかいな男のお守りは大変だろうと、まだ見たこともない宰相に同情する。呆れた視線をすぐそばの男にやると、眉間のしわを増やして、横目でこちらを見ていた。はあっと、大きくため息をついて、腰に手をあて、右手でびしっと鏡を指差す。

「あんたこそさっさと持ち場に戻りなさいよ！あと、口の悪い部下のしつけもちゃんとしてよね。失礼なことばっかり言うんだから、まったく！それに、私はライの女なんかじゃないから！」

ライから赤毛の男に目線を移し、きっぱりとした口調で宣言する。誤解ははっきりと解いておくべきだ。睨みつけるようにきつい視線を送る私を、男はあごに左手を添え、値踏みするように見下ろす。

ふうん、と呟いた後、にやりと口角をあげた。

ふと、視線をずらすと、しぶしぶ戻ろうとしていたライもこちらを振り返り、怜悧な雰囲気そのままに私をじっと見つめていた。最近、直接感じていなかったライの肌に突き刺さるような気配に、身体が硬直する。眉をよせ、その空気に耐えていると、ライは、すっと視線を外し、無言で踵をかえした。呆然とその様を見送り、向こう側の扉が閉まる音で、はっと我に返り、無意識に詰めていた息を吐いた。

「……なんかライを怒らせるようなこと言ったっけ。いつもあれくらい言ってるし、何が悪かったんだろ」

背中にじっとりと嫌な汗をかいている。右手で額を押さえると、また事態がややこしくなりそうな予感に、再度、大きく息を吐きだした。

私なにか悪いことしましたか（後書き）

ここまで読んで頂いてありがとうございます^^気の向いたときに書いてることがまるわかりな更新状況ですね。そして友希はライをぐっさり切り裂いた模様です。笑

早く助けてください

鏡の中の愛人説を否定して、すっきりしたのはいいのだが、あれからライの機嫌がとてつもなく悪い。あれから二日、こちらに来ることも、話しかけてくることもなく、とても気まずい。事実を主張しただけなのに目も合わさず、冷たい空気をビシバシ投げてくるのはやめてほしい。

「もうっ、なんか言いたいことがあるならはっきり言いなさいよね」

ずっとあの美貌の青年に睨まれ続けるのも、正直しんどい。鏡面にバスタオルをかけようか迷うところだ。かけたら、かけたで余計に機嫌を損ねかねない。何を怒っているのか、わからない以上、こちらから謝るのもおかしいし、謝る気もない。だが、鏡が繋がって、お互い行き来できるようになって、同じ家で生活しているような感覚があるので、このままの状態が続くのは、精神衛生上あまりよろしくないと思われる。

キッチンでお湯の沸いた音がする。お気に入りのマグカップに紅茶のティーバッグを入れ、お湯を注ぐ。いつもなら、もうすぐライが部屋に帰ってくる時間だ。ほどよい頃合いで、ティーバックを捨て、ミルクを少し入れる。白い湯気の立つカップを両手で持って、鏡へ向かう。考えてもわからないので、直接ライに怒っている理由を聞こうと思う。ライが帰ってきてから、彼の部屋に突撃するのは、とてつもなく勇気がいるので、帰ってこないうちから、待ち伏せすることにした。完璧に不法侵入だが、それは、ライの機嫌がなおったら、謝って許してもらおう。

鏡の前でスリッパをはく。向こうは基本土足で、私の部屋は土足

厳禁なので、ライと私用のスリッパを置いたのだ。大きく息を吸って、お腹に力を入れる。よし、と自分に気合を入れて、向こう側へと踏み出す。足に毛足の長い絨毯の感触を感じ、何の抵抗もなく、ライの世界に受け入れられたことに少しほっとする。

夜中の襲撃事件直後は、なくなっていた小さい丸いテーブルが戻ってきていた。あの悲惨な状態から、私が目覚め、初めて向こう側に行った時には、なかったはずだ。その他はなぜか、すでに元通りに近い状態になっていたが、テーブルだけ破損が激しかったのかもしれない。

その丸いテーブルに添え付けられているイスに腰を下ろす。カップを両手で包みこみ、じんわりとした温かさを感じて、ふぅ、と息をつく。この広い部屋に一人だと、本当に静かだな、と思っていると、扉の向こう側で、なにやらバタバタと音がした。もしかして、ライが帰って来たのか、とぎゅっと身体に力が入る。緊張しつつも、じっと見つめていると、バターンっとはじけ飛ぶような勢いで扉が開いた。

「陛下っ！！大丈夫ですか！？」

鬼気迫る様子で、この間の赤毛の男が部屋に飛び込んできた。圧倒されて少しのけぞる。

「へ、陛下じゃないんだけど。」

「え、あれ？陛下の愛人ちゃん？確かに陛下だと思ったんだけど。それにしては魔力が小さいから、何かあったのかと思って、急いで来たのに、陛下がいなくて愛人ちゃんがいるってどういうこと？」

臨戦態勢の雰囲気を若干纏わせたまま、大股でこちらに近づいてきて、私の顔をじろじろとぶしつけに眺めてくる。ライとは違う人がこの部屋に入ってくる可能性があるのをすっかり忘れていた。イスに座ったまま、固まっていると、ずかずかと横に歩いてきた男に、あごをつかまれた。せめてもの抵抗で、上背のある男をきつく睨みつける。

「ははっ。これは、陛下が気に入るのもわかるなぁ。鏡の中にいる時は、わからなかったけど、あんた、陛下と同じ系統だったんだ。しかも、純粋な黒なんじゃないか？なんで髪の色と一致してないのかわからないけど、結構な魔力持ちだったんだな」

興味深そうな顔をして、意味がわからないことを言わないでほしい。私は魔力を持ったことなどないし、系統って、髪の色って、一体何のことだ。眉を寄せて、困惑していたら、燃えるような赤が迫って来た。驚いて身を引こうとしたが、男の手が、あごをつかんだままだったので、動くことができなかった。きりっとした眉に、意志の強そうな赤い瞳が、覗きこんで来る。ライとは違ったワイルドな美貌と迫力に圧倒される。ライで耐性がついていなかったら、心臓が悲鳴をあげていたところだ。

「そういえば、あんた、陛下の愛人っての思いっきり、否定してたっけ」

あれから、陛下の機嫌が悪くて、どうしようもないんだよな、と男は独り言のようにごちる。そんなこと、私だってどうしようもない。だから、ライと直接話し合おうと思って、こうしてここにいるのだ。あんたに用はないのよ、と思っていると、赤毛の男は、何か思いついたのか、嫌な形に唇を上げた。背筋がぞくっとして、これはまずい、と私の頭の中で警報が鳴る。この男の前では、ライの愛

人ということで通しておいた方がきっと安全だ。だが、口を開こうにも、つかまれたままでは、開けない。

「なあ、陛下のものじゃないなら、俺のものになれよ」

とんでもないことを言いながら、目を細め、薄く笑みを浮かべて、更に顔を寄せてくる。獲物を見つけた肉食獣のような雰囲気にのまれそうになる。どうして、こっちの男は、スイッチが入るとこんなに妖艶なのか。このままではいろいろと危ない。男の顔を、両手で、がしっと掴み、自分から遠ざけようとぐいぐいと追いやる。しかし、私の力が弱いのか、少し眉を上げた男の顔は、全く動かない。どれだけ頑丈なんだ、こっちの人間は。

「なんだ、あんたもその気なんじゃねぇか」

にやっと、笑って唇を寄せてくる。待て、待て、待て。どうしてそうなるんだ。自分の非力さに泣きそうになるが、このままではキスされてしまう。がっちりつかまれたあごでは、声も出せないし、男の顔をつかんだまま、じたばたともがく。誰か、この状態をなんとかしてくれ。早く、早く部屋に帰って来てっ。私は、目をぎゅっと閉じて、心の中で、強くライの名を呼んだ。

早く助けてください（後書き）

読了ありがとうございます＾＾おひさしぶりで、すみません。赤毛さん出してみたら、こんなことになりました。ライが出てこなかったよ＾＾；

ベタな展開で助かりました

「うおっ！あぶなっ！」

ふっ、と赤毛の男の気配が遠のいたと思ったら、柑橘系の爽やかな香りに包まれた。イスに座っている上から被さるように手を回されている。そっと、目を開けると、見慣れた美貌が全てを凍りつかせるように冷たく厳しい視線を目の前の男に向けていた。

「ラ、イ？」

一瞬にして現れた彼に目を瞬かせる。肩に回されている腕の感触からすると、多分実物だ。確かめるようにその腕をぎゅっとつかんだ。あまりにも突然すぎて、実感するのに時間がかかった。来てくれてありがたいが、一体どこから来たんだ。

「冗談ですよ、陛下。そんなおっそろしい殺気出さないでください。他の近衛たちもやってきちゃうでしょ。陛下の機嫌の悪さに辟易してたんでちょっと遊んだだけです。とっとと愛人ちゃんと仲直りしてくださいよ」

ライの冷徹な視線を受けているはずの男は、飄々としている。その上、火に油を注いでいる。私に巻きついている腕の力が強くなった。助けてもらっておいてなんだが、私の肩が危ない気がするので、そろそろ離してもらおうか。ちらり、とライの様子をうかがうと、人でも殺しかねない気配を纏っていた。ぎょっ、として静かに目線をそらす。

「これはお前が遊んでいい相手ではない」

なんとも凄みのきいた重低音が上から降ってくる。久しぶりに聞いたライの声がおどろおどろすぎて、鳥肌がたった。いろいろと好き勝手に言われていて、反論したいのだが、ライの醸し出す雰囲気に完全にのまれている。

「わかってますよ。陛下のものには手ぇ出しませんって」

押しつぶされそうな重い空気の中、赤毛の男は両手を上げて降参の意志表示をした。ふざけているように見えるが、燃えるような赤い目は、ライをまっすぐに見つめている。目をそらせば、とって喰われるといわんばかりだ。

「二度はないぞ」

圧倒するような気配を纏ったままの冷たく重い声が響く。

「は。では御前失礼致します」

男は、今までの態度とは一変して、慇懃すぎるほどの礼をとったかと思うと、その場から一瞬で消え去った。来るときには扉から入ってきたから、帰りもそこからだと思いこんでいた私は、呆然と男がいた場所を見つめる。余りにおとなしい私を訝しく思ったのか、ライが、回した手をほどき、顔を覗きこんできた。

「どうした、先程からおとなしいが、具合でも悪いのか」

冷淡な空気を霧散させたライが眉をひそめている。目の前のライの秀麗な顔に、はっと我に返り、ひらひらと手のひらを振る。

「や、大丈夫。ってか、あんたが恐いオーラ撒き散らしてるから、口挟めなかったのよ。まあ、一応助かったからお礼は言っとく。ありがと」

ふい、と横を向いて、膝の上で拳を握りしめる。私の口はいつも以上にぶっきらぼうな物言いだ。妙な緊張感を吹き飛ばそうと、ふるふると軽く頭を振る。左の頬に手を添えられて、ライの方へ向けられると、不機嫌そうに細められた漆黒の目に囚われた。

「それが人に礼を言う態度か」

知らずびくりと肩がはねる。ライの残酷な一面が身体に刻み込まれてしまっているのだろうか。今にもとって喰われそうな気分だ。まだ先程の重い空気をひきずっているのかもしれない。私が身震いしたのがわかったのか、ライは片眉をあげた。

「お前、もしかして私が恐いのか？」

じっ、と見つめられて、心がざわめく。膝の上の拳を握りしめなおして、息を吸った。

「も、もしかしなくても恐いわよ！顔が人じゃないみたいに綺麗だから余計にね。こないだから何に怒ってるのかわからないし、いいかげん居心地も悪いし、直接聞いてやろうと思って来てみたら、ライじゃない奴が来るし、もうわけわかんない」

嘘をついても仕方がないので、溜まっていた鬱憤を吐き出した。今日ライの部屋に来た目的も思い出した。あの男の乱入のせいでうやむやになるところだった。いや、乱入があったから、ライが出て

来たのかもしれないが。

「お前…ほんとに恐いと思っているのか？私を心底恐れている奴はそんなにずけずけと言ってはこないぞ」

ライは私の勢いに押されたのか、眉をひそめ、半眼になりながら、腕を組んだ。

「だから、恐いって言ってるじゃない。で、ここんところ機嫌悪かった理由は何なの？」

これがまさしく私の中での今日の本題だ。どんな挙動も見逃さないように、じっ、とライを見つめる。

「……それはもう忘れろ。私も大人げなかった」

言いづらそうな小さめの声が響いた。ライは斜めに視線をそらし、首の後ろを手でさすっている。理由はとても気になるが、めずらしく下手に出ているライを問い詰めると、ろくなことがない、と私のあるかわからない第六感が言っているので追及するのはやめておく。嫌な予感ほどよく当たるのだ。

「忘れてあげてもいいけど貸し一つね」

助けてもらっておいてなんだが、あえて図々しいことを笑みに乗せて言う。目的も失ったことだし、自分の部屋に帰ろうと、テーブルの上のカップを持って、立ち上がった。ミルクティーはすっかり冷めきっていて、思うより時間が経っていたようだ。

「ユウキ、私が部屋にいる時に、また来い。こちらの世界はいろい

ろと物騒だからな。今回は何事もなく済んだが、次もそうだとは限らない」

ライは機嫌が回復したのか、口許に薄く笑みを浮かべている。不穏な発言に笑顔が引き攣りかけたが、ライの純粋な笑みを見ると、自然と頬が緩んだ。

「気が向いたらね。じゃあ、おやすみ、ライ」

素っ気なさをよそおったことを、あの真っ黒な瞳に見透かされてはいないだろうか、と内心どきどきしながら、鏡に踏み出す。

「ああ、おやすみ、ユウキ」

後ろから追いかけるように聞こえた声の柔らかな部分が、心に染み込んでいくような気がした。

ライは恐い。でも優しい。たった二日間、口をきかなかっただけなのに、ライの声に、自分がこんなにほっとするとは思わなかった。口許が緩んで戻らないくらいには、嵌まってしまっている。

私は、鏡に背を向けたまま、観念するように目を閉じ、浮き立つ心を静めるために、一つ息をついた。

ベタな展開で助かりました（後書き）

読んで頂いてありがとうございます＾＾だいーぶ間が空いてしまって、すみません。生温く見守ってくださるとうれしいです。赤毛さんの名前をそろそろ決めてやらねばと思いつつ。

忘年会から帰るとお父さんがいました

あれから、一週間程たつが、ライとは普通に接している。本人に直接恐いと打ち明けた後も、ライの私に対する態度が変わらなかったので、私もつられるように自然体でいられた。

今日は大学のゼミ仲間と一緒に忘年会だ。大学近くの量と安さが売りの居酒屋に来ている。六人と少人数なので何かと気心がしれていて居心地は悪くない。なんの偶然か男女が半々なので、端から見ると合コンのようだ。ちなみに初対面の人と気を遣いながら、飲んだり、食べたりするのが面倒なので、いまだかつて合コンに行ったことはない。

「そんなだから、あんたいつまでたっても彼氏できないのよ。もうちょっとこう、やる気を見せなさいよね」

ばしっと肩を叩いてくるのは、入学当初からの友達で、中原杏子（なかはらきょうこ）だ。ぱっちりした目が、印象的である。結構きついことも、ずばっと言ってくるが、裏表がないので、そのサバサバとした感じが、私には好ましい。ちなみに私を率先してホラー映画に連れ込んだのが彼女である。

やる気って何だ、と思いながら、だってさ、とすねたような言葉が口をつく。好きな人が異世界の人間だった場合はどうすればいいのだ。

「俺は、友希が彼氏いないの不思議だけどなぁ」

口を挟んで来たのは、ゼミで一緒になってから話すようになった

西口慧(にしぐちけい)だ。ビールジョッキ片手に安い慰めをするな、とは思うが、表面上はにこりと笑顔をつくった。

「おだてても何も出ないわよ」

杏子が呆れた笑いを口許に浮かべている。わかっている。この口は可愛くないことばかり言うのだ。ライにからかわれた時の自分の反応を思い出し、少しやさぐれた気分で、カシスオレンジを流し込む。いつもちょっとずつ、時間をかけて飲む私にしては、ペースが速く、もうすでにグラス二杯を飲み干していたので、杏子からストップが入った。

「友希、お酒弱いんだから、もうやめときな」

その一言で会が解散ムードへと流れる。会計へ行く前に、携帯で計算して割り勘するのもいつものことだ。みんなのお金を集めて、杏子がレジに向かう。残りの五人は、居酒屋を出て、入口を避けたところで、帰りの算段をする。といっても、このメンバーで飲むと、電車組の杏子を含めた四人、下宿組の慧と私二人のグループに分かれる。

アパートまでの道のりを歩く。時折吹きつける身を切るような寒さに首をすくめる。マフラーに顔を半分埋めながら、ちらりと横を見ると、ダウンのポケットに手をつっこんだ慧と目が合った。

「なあ、友希さー、最近お前ん家で飲みとかやんないよな。家に人呼ばなくなったっていうかさー」

なんとなしに口にしたのだろうとは思う。だがライと同居まがいの環境にある身としては、内心ドキドキである。

「部屋が散らかってるから、人呼べる状態じゃないのよ。家飲みしたいんだったら、私の部屋ばっかりじゃなくて、慧の部屋を提供したらいいじゃないの」

にっこりと笑って、一番あたりさわりのない言い訳をしておく。あの鏡を誰かに見られるわけにはいかないし、ライと鉢合わせなどになったら目も当てられない。杏子あたりにでもばれた日には、質問責めにあうこと間違いなしだ。

慧は、俺の部屋だって、人呼べる状態じゃないよ、と苦笑いしている。先程飲み過ぎたのか、足元が少しふわふわする。アパート前のコンビニが明るい光を放っているのが見えた。慧の下宿先は、コンビニを越えて、細い路地を入ったところだ。

「じゃあ、私ここだから。今日は楽しかったねぇ。また学校でね」

慧に顔を向け、ひらひらと手を振る。よしっ、とばかりに踵をかえしたところで、何かに躓いた。お酒のせいか、踏ん張りがきかずに、ふらっとよろめく。

「わっ。何してんだよ。大丈夫か？」

右腕をとられ、慧にぶら下がる形で、なんとか持ちこたえる。最近こんなことが多くないか。しっかりしろ、と自分に活をいれ、自力で立つ。

「だいじょーぶー。ありがと、助かった」

「気をつけろよ。危ないから部屋まで送ろうか？」

慧のその一言で一気に目が覚める。せっかくごまかしたのに、部屋まで来られては、意味がない。ライが部屋の外に出ることはないと思うが、何かの拍子で遭遇してしまうかもしれない。後で被害を被るのは全て私なのだ。

「いやいやいや、すぐそこだから大丈夫だって。もう遅いし、慧も早く帰ったほうがいいよ」

ぶんぶんと首を振る。頭がくらくらして気持ち悪いが、そんなことには構っていられない。訝しげに見つめてくる慧に、さっさと帰れ、と笑顔をつくる。

私の背後のオーラに気づいたのか、気をつけて階段上がれよ、という言葉を残し、やっと家路についてくれた。私は子供か。心配してくれているのはわかるのだが、部屋までついて来られるわけにはいかない。はぁーっと大きく息をつく。

「ただいまー」

精神的に疲れた。さっさとお風呂に入って寝ようと、部屋に入ると、目の前に、ぬっと腕が現れた。進行を妨げるように手のひらを壁についている。私の上に影が落ちるのがわかるのだが、顔をこれ以上あげたくない。

「遅い。こんな時間まで何をしていた」

娘の帰りを待つ父親のような台詞だ。心の中で、頭を抱える。今日、忘年会があることをライに言い忘れていた。どうして、飲み途中にでも思い出さなかった、自分。

「う、あー、の、飲み会に行ってました。言うの忘れてました。ごめんなさい！」

潔く謝るのが一番、と両手を前で揃え、勢いよく腰を直角に曲げる。髪の毛がわさーっと被さってくる。

「いつも私が帰ってくるころには居るのに、部屋は真っ暗だし、襲撃にあったのかと思うだろ」

素直に謝ったのが良かったのか、ライから発っせられる空気が少し和らいだ。それにしてもこちらの世界で襲撃はない。そんな恐ろしいことが日常的にあってたまるか。もう大丈夫かな、と顔を上げようとしたら、すっと、伸びてくる手が見え、もう一度きっちりと頭を下げる。何をされるのだろうと、床に視線を固定していると、顔の横に長い指が差し入れられた。被さる髪を一房掬うと、ふわふわと弄ぶ。

「お前の髪は、柔らかいな。手触りがいい。これで黒髪だったら最高なんだがな」

何がライの興味をひいてしまったのか。髪に触れられるのは、予想以上に緊張する。心臓がすごい勢いで、音をたてている。そろそろ深いお辞儀の体勢もしんどくなってきたので、おそるおそる顔を上げた。

「私もともとは、黒髪だけど」

髪を弄んでいた手が止まる。不思議に思って、首をかしげると、するりと髪が指からこぼれ落ちた。がしっと両肩を捕まれ、長い睫

毛を数えられそうなほどに顔を寄せられる。ライの発する空気がピンと張り詰める。足の先から頭の先にむかって、総毛立つようだ。

「ユウキ、それが本当なら、私以外のディアスの民には絶対に知られてはならぬ。わかったな」

いつもよりトーンを落とした声で、ゆっくりと、しっかり言い含めるように話しかけてくる。黒々とした瞳を細め、じっと見つめて、私が了承するのを待っているのがわかる。突然変わった雰囲気に戸惑いながらも、ライのあまりに真剣な表情に気圧され、私はこくこくと、首を縦に振った。

忘年会から帰るとお父さんがいました（後書き）

読んで頂いてありがとうございます＾＾忘年会とか書いといて年明けたらまずいだろ、と３１日に更新です。クリスマスは、華麗にスルーしてしまいました。一応恋愛物を目指しているのだが。読んで頂いてる方、今年もお世話になりました。来年もまったりよろしくおねがいします＾＾

楽しみはなんですか

ライが、黒髪がどうのと言っていたが、何故あんなに深刻だったのかわからない。ライ自身、艶やかな黒髪だし、なんの問題もないように思える。そういえば、あの失礼無礼きわまりない赤毛の男は、最初、私をライだと勘違いしていた。それと何か関係があるのかもしれない。

一度、ライの世界についてきちんと教えてもらわなければ。赤毛の男が魔力だなんだと言っていたので、あんまり知りたくないのだが、鏡が繋がってしまったので仕方がない。ライの世界での常識とやらを知らないことには、いろいろと判断に困るし、自分の知らないうちに命の危険が、といった事態になど絶対になりたくない。まだ、繋がってから少ししか関わっていないが、多分ライの世界には、危険要素がそこらへんにゴロゴロ転がっている気配がする。とりあえず情報を集めよう。

とは思うのだが、今は、目の前の料理が最優先事項だ。今日はなんと、ライの夕食に便乗させてもらっているのだ。いつも自炊で、一人分だけ作るのってめんどくさいんだよー、とライにぼやいていたら、一緒に食べればいいじゃないか、とライが何でもないことのように返してきたのだ。その時、ライの後ろに後光がさしたと思う。ありがたいことこの上ない。いただきます、をする時、一緒に目の前に座っているライも拝んでおいた。

それにしても本当に美味しい。サラダは、新鮮な野菜がふんだんに使われていて、目にも緑や赤が、鮮やかだった。メインのお肉の焼き加減も絶妙だし、かかっているソースがフルーティーで、食べ

やすい。肉汁がじゅわっと口の中に広がって、幸せそのものだ。美味しいものは、人を幸せにする。自分でも、ものすごく笑顔で食べ続けているのは、わかっているのだが、顔が勝手にそうなるのだから仕方がない。

「お前、今までどんなもの食べてたんだ。満面の笑み過ぎて、恐いぞ」

完璧なテーブルマナーを披露しつつ、上品に食事を続けていたライが、何かに耐えかねたのか、呆れた視線を送って来た。人の笑顔をなんだと思っているんだこの男。こちらの世界には、失礼な男しかいないのか。もしそうなら、この世界の女性たちには、おおいに同情する。

「美味しい料理を美味しく頂いてるだけなのに、なんでそんなこと言われなきゃならないのよ。こんな料理を毎日食べられるライは、幸せなんだから、ライこそもっと幸せですって顔しながら食べなさいよね！」

切り分けた最後の肉を口に運ぶ。やっぱり美味しい。ライも綺麗な所作で肉を口に入れ、咀嚼している。のどぼとけが上下に動き、ごくりと飲み込まれてゆく。

「幸せ、か」

「そう、幸せ」

食べ終わった皿が下げられ、デザートが用意される。侍女さんたちは、てきぱきと自分の仕事をこなしている。以前のような視線はまったく感じられず、食事に集中できた。腐ってもプロということ

か。

ライは、テーブルに視線をおとしたまま、何か考えこんでいるようだった。何を思い耽っているのか、気にはなるが、デザートが私を呼んでいる。ブルーベリーのような色味のジェラートの周りに、小さくカットされたフルーツが添えられている。溶けるまえにいただきます、とスプーンでひとすくいし、口に入れた後は、無心に手と口を動かした。すべて食べ終わり、ごちそうさまでした、と手を合わせる。

「お前の幸せはずいぶんと安上がりなんだな」

いつの間に食べ終わっていたのか、ライは、テーブルに肘をつき、顔に手を当てて、こちらを見ていた。口許には、私の食べっぷりに対する呆れと感心の入り混じった笑みが浮かんでいる。

「安上がりってねぇ。それじゃあ、ライの幸せってなんなの？」

「……わからん。考えたこともないからな」

視線を横にそらし、憮然としている。考えたことがないのか。確かにライが幸せについて、すらすらと語り始めたら、それはそれで微妙な気分になる。

「えー？じゃあ、楽しいなって思うことは？」

「そうだな……私を暗殺しに来る奴らを、返り討ちにするのは楽しいな」

うわ、だめだ。またえらく殺伐とした楽しみが出て来たものだ。

額に手をあて、ゆるく首を振る。その様子を横目で見ていたライが、不思議そうな表情をした。

「なんだ、何か問題でもあるのか」

「いえ、ありません。ありませんけど、これからは別の楽しみも見つけていきましょうか、陛下？」

口の端を若干ひきつらせながら、笑顔を張りつける。あまりにも純粋な問いに、否定することができなかった。ライの反応からすると、返り討ちが楽しみだというのは、こちらでは普通のことなのかもしれない。知ってもうれしくない常識が垣間見えてしまった。戦闘大好き人間ばかりだったらどうしよう。何かの間違いで、突然、決闘とか申し込まれたりしたら、どうにもできない。何か武術関係習っておくんだった。まあ、ライとか赤毛の男とか、強いですよオーラ全開の奴だったら、どちらにしろ太刀打ちできないが。

「お前が敬語を使うと、気持ちが悪い。それに陛下などと呼ぶな」

私が脳内で未来の決闘相手を打ちのめす算段を立てていると、ライの不機嫌そうな声が聞こえてきた。つくづく、口を開けば暴言ばかりの男である。

「あと、別の楽しみなら最近見つけたぞ」

視線をこちらにやりながら、ゆったりとした動作で足を組み換えている男に、にっこりと笑顔を向けた。そんなに嫌ならあえて敬語を使ってやる。

「あら、陛下。それはよろしゅうございましたわね。今後は、返り

討ちだけでなく、そちらの方にも力をお入れになられてはいかがでしょう？」

最後に小首もかしげてやると、ライの黒曜石の瞳が鋭い光を帯びた。テーブルについていない方の手が、こちらに向かって伸びてくる。頭の中で避難警報が鳴り響いた。だが、闇色の瞳に縫いつけられたように身体が固まって動けない。長く節高い指の背で、すっ、と頬からあごにかけて撫でられた。肌が粟立ち、顔に血がのぼるのがわかる。

「そうだな。その方がおもしろそうだしな」

薄い唇の端があがり、頬を撫でていた手が、あごを捉える。少し体温の低い親指がふにふにと唇をもてあそんでいる。頭の中は混乱と羞恥で、もう何がなにやらわけがわからない。全身真っ赤な気がする。いいかげん自分でも慣れないかと思うのだが、妖艶フェロモン垂れ流し男の醸し出す空気が濃いせいか、いつも回避できないのだ。ううっ、と呻くと、ライは私を開放して、くつくつと喉の奥を震わせ笑い始めた。

「お前免疫ないにもほどがあるぞ。そろそろ私に慣れろ。次に進めないだろ」

「は？な、なな、何言ってんの！？てか、なんで急にスイッチ入ったのよ！いま、そんな流れじゃなかったでしょ？」

座っていたイスから勢いよく立ちあがり、テーブルをべしべしと叩く。楽しそうな光を宿した黒々とした瞳と目が合う。ああ、もう、そんな表情でこちらを見ないでほしい。未来永劫、この人外な美貌を持つ男に対する免疫など、できない気がする。

「も、もう部屋に帰るっ！夕食ごちそうさま！おいしかった！」

これ以上遊ばれてたまるか、とライを精一杯睨んでから、踵を返し、鏡へと向かう。楽しみを聞いただけで、どうしてこんな目にあわなければならないのか。寿命がいくらあっても足りない。別の楽しみが一体何だったのかわからないが、どうせロクなものではないだろう。背後から、ライの視線と、笑いを噛み殺している雰囲気を感じながら、私は、とりあえず、ライには、返り討ちではなくて、普通のありふれた楽しみを見つけてもらおう、と決心した。

楽しみはなんですか（後書き）

読了ありがとうございます＾＾新年初更新！皆様あけましておめでとうございます。今年もよろしくおねがいします＾＾　どなたか友希に対ライ用の予防接種をwそして赤毛の男に名前をーwそうです、まだ決まってません。そのうち決めます。そのうち＾＾

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3079y/

こちらとあちらとそれに関する諸々の話

2012年1月11日00時53分発行